

呪霊の子

充椎十四

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪胎九相図を生んだ女が生んだ子は何人いたのか分からない。

その中に一人くらい、オタク気質なのがいたって良いではないか。

pixiv掲載をまとめて加筆修正かけたもの。

※作風の詳細説明

- ・オリ主はじめ、オリキャラがかなり登場する。
- ・オリ主は舞台装置の一つであり、あまり登場シーンはない。
- ・敵役として散っていったキャラクター、特に呪胎九相図とフィジカル男に焦点を当てている。
- ・原作ブレイクがたくさんある。

3	2	1
59	48	1

目次

旧財閥系企業の中で抜きん出る、八咫グループ。その創業者一族には守り神がいるという。童女の姿をしているというその守り神を、彼ら一族の者はこう呼ぶのだ——八咫姫、と。

うつすらと明るい水の中でまどろんでいる私の耳に、膜の外から声がする。

——夫もいないのに孕むだなんて。

——誰の子だ、言え！

——阿婆擦れを育ててしまった。私は恥ずかしい。

罵られ、怒鳴られるたびに、同じ声が訴える。

——誰もいかがわしいことをしてなどいません。

——私にだって分からないうちに孕んでいたのに、誰の子だなんて分かるはずないじゃない！

——私は阿婆擦れじゃない。どうして信じてくれないの、お母さん。

水に満たされた袋の中から押し出されて外界へ出た私ともう一人を待っていたのは、信じられない物を見たと言わんばかりの目をした人々。

「みつ、三つ目!？」

「なんだこの化け物どもは……本当におとよの腹から出てきたのか!？」

それと、厨の柱に掴まり汗だくで死にそうな顔色をした母と、スタンドを禍々しくしたような容姿の怪物。怪物は私が床に転がっているのも気にせず母に覆い被さると、出産の為開き切った母の会陰に怪物の性器らしきものを突っ込んだ。私を見下ろす人々も、母も、この怪物が見えていないのだろう——この場で怪物が見えているのは私だけなのだ。

母が呻いた。出産の疲労によるものなのか、見えない怪物に犯されているからなのか。

私の脳内を巡ったのは、吸血鬼ハ○ターなどの悪魔祓いに関する小説でよくある設定だった。

私は人から驚き恐れられる容姿をしていて、人には見えない怪物が見える。——ということとは、私は怪物とのハーフブラッドなのではないか。そしてこれはなんとなく……私の思い込みかもしれないが、私の方がこの怪物より強い。

「悪魔よ、退け。この人の許から出ていけ」

試しに口を開けば驚くほど滑らかに声が出た。羊水でふやけた腕を持ち上げ、放り投げるように腕を動かせば、怪物は爆発四散して消えた。

母がぐしゃりと床に倒れる。支えを失ったからかもしれない。

「この人は魑魅魍魎に好かれやすい。ただ人の目には見えぬ恐ろしい者共に、彼女は知らぬ間に犯され、私たちを生んだ。彼女を守りたいなら、徳の高い僧侶や神主のいる寺などに預けるのが良いだろう」

きつと私の祖父母に当たるのだろうか中年の男女が、私をまじまじと見下ろす。

彼らの服装は布を何度も当てて直した跡のある着物で、他の者達——親戚や産婆だろう老婆も同様の恰好をしている。

「今の陛下はどなただ？ この数年内に起きたことは？」

「陛下の名前は存じ上げんが、三年ほど前に、將軍様が天皇陛下に將軍の地位をお返しになった」

一番身ぎれいな恰好をした親戚が口を開いた。年を食っているが男なので産婆ではないだろう。

現代日本語が通じて將軍が地位を返上したということは、今は明治時代だ。学校では近代史をほとんどしないから記憶があやふやだが、明治時代は数十年ほど続いたはず。その次の大正は十五年くらい、昭和は六十四年、平成三十一年、令和と続く。私の知る時代まで百年以上ある……。

「長介のおっさん、三つ目の化け物に何を」

「馬鹿かいおめえは。一つ目だろうが三つ目だろうが、天皇陛下に仕えているならわし等と同じじゃねえか。お天道様のお使いの鳥も足

が三本ある。ならお使いのヒトは目が三つなんだろうよ。おい太兵衛。おつねさんもだ。おとよが生んだのはお天道様のお使いだったんだから、決しておとよを責めるんじゃないぞ」

長介と呼ばれた男は太兵衛とおつね——私の祖父母をじつと見つめながら、ゆっくりと言ひ聞かせた。

「お使いさんよ、寺へやればおとよは無事なのかい」

「憑き物祓いで知られた寺や神社が良い。商売繁盛なら稲荷、厄除けなら八幡を詣でるように、悪いモノに憑かれやすいなら憑き物祓いだろう」

「そりゃあそうだ」

長介は納得顔で頷く。

私はそろそろ寝転がったままの状態に飽いて、両腕を後ろに突っ張ってみた。体格の問題か起き上がれなかった。

「長介さん、貴方に頼みたいことがある」

おとよ——母は、私の存在を知ることなく寺へ行つた。私とともに生まれた片割れは死産で、頭ばかり大きく胴が小さかった。栄養状態の悪さ、現代では考えられないような衛生状態、未だ猛威を揮う病、親からのストレスその他……死産の原因は一つではないだろう。その死んだ子だけを連れて、母は寺へ行つた。

知らぬうちに孕まされた子だとは言つても、彼女は命をかけて生んだ子を愛しく思わない女ではない。胎児の時分、日に何度も彼女から掛けられた声は優しく、愛に満ちていたからだ。

彼女がもし私の存在を知れば、自分の手で育てたいと考える可能性がある。しかし私の父親はどこの誰とも分らない、悪霊だか悪魔だかだ。寺の坊主らに「うっかり」殺されては堪らない。

彼女が寺に行くまで長介の家で過ごさせてもらい、彼女が行つた後、祖父母の元に戻りたい。そう願つた私に、長介は「なら、ずっとうちで過ごしゃいい。下の孫息子ももう十歳ちよつとだ、赤ん坊に悪さすることはあるめえよ」と胸を叩いた。——私を神の使いと言ひ出したのは長介だ。祖父母の許にいるより、長介の許にいる方が安全だろう。私は頷き、頼むと答えた。

——しかし二年後、母との連絡が取れなくなると祖父母が相談に
来た。預けた寺に行っても「我々より強い憑き物祓いの下に移った。
そのうち本人が手紙を寄越すだろう」と言うばかりだが手紙を待つて
もう三か月になる。彼女がどこに行ってしまったのか、神の使いなら
分かるのではないかと。

額にもう一つ目があるとはいえ、私は千里眼持ちではない。血縁だ
から分かるにおいで見つけることもできるだろうが、私のこの異形で
は外出が難しい。

預けた寺が教えないのなら、その寺と仲の悪い寺に相談を持ち掛け
てはどうか。あら探しのための正当な理由を欲しているだろうから、
調べてくれるかもしれない。そう伝えて、それからまた五年。

七歳になった私の許に届いた情報は——母が、悪霊の子を孕む実験
に使われていた、というものだった。犯人の名は加茂憲倫。京の都で
先祖代々悪霊祓いをしている、呪術師。母が実験の結果どうなったの
か、今どうしているのかは不明。しかし母が孕み、墮胎させられた九
人の弟妹は、その男が持っているらしい。

「憎い——ああ、憎い。加茂なにがしが憎い。呪術師とやらが憎い」
何の為に寺へ預けた。守る為に寺へ預けた。

人の心を知らぬ屑のオモチャにさせる為などではない。

——早く生まれておいで、可愛い子。私は貴方を待つてるからね。

羊水の中で聞いた愛に溢れたあの声に苦しんでほしくなくて、守り
たくて、それが最善だと思ひ別れたのに。泣き崩れるのは、ああ、こ
んなにも息苦しい。

「八咫姫様、泣かないでください。きっと我々が伯母上の仇を討つて
みせます」

「カモだかハモだか知らんが、何するもので」

長介の孫息子二人——義介と正平が飛んで来るや否や、私を抱き上
げ揺らし始める。義介の体温に冷え切った体が温められ、時間はか
かったが涙が止まった。

先祖代々の呪術師と言う。つまり、加茂憲倫は一族で呪術師をして
いる。特殊な武術なども修めているだろう一族を、若者がたった数人

しかない我々が襲撃しても踏みつぶされるだけだろう。復讐は難しい。

「義介、正平。我々は、まだ歴史が浅いとはいえ商家だ」

二人ははいと答えて頷く。

「我々の戦場は商売だ。憑き物祓いではない。——奴らが膝を折つて謝罪に来るほどに、家を大きくしよう。許してほしいと、額に砂利が付くほどに頭を下げさせよう。それが我らの出来る仇討ちだ」

殺してしまいたい。呪ってしまいたい。だが、加茂憲倫を殺すことで、他の呪術師とやらから目を付けられては困る。私は悪霊の種から生まれたのだ、加茂憲倫と違い真つ当に悪霊と戦っている者から危険視されては困る。

私だけなら良いが、長介らが巻き込まれたら……きつとその時は悔やんでも悔やみきれない。

「そして、私の弟妹を。弟や妹になるはずだった子らを、取り戻してほしい」

——百五十年待った。長介を、義介を、正平を、義介の子を孫を見送った。

「においがする」

東京都内だ。同じ母から生まれた子の強いにおいが、東京都内に突然現れた。

迎えに行かねば。私の可愛い弟妹。同じ血を分けた子。家の子に声をかけるのも忘れて街へ出る。

「ねえお前、私の弟だね？」

長い剛毛を二つに括った男を見つけて声を掛けた。男はゆっくりと振り返り。

正一郎はふと顔を上げた。廊下を軽い足音が通り過ぎていったよな。読みかけの本にしおりを挟んで横に置くと、はまり込んでいたソファをびよんと飛び降りて廊下に顔を突き出す。誰の姿もない。気のせいだったのだろうか？

私室以外は扉を開けっぱなしにする決まりの我が家だ、さっきの足

音が気のせいとは思えない。——確か足音は奥の部屋から玄関の方へ向かったはず。既に去った足音の主を追って廊下を進み、階段を下りてぐるりと周囲を見回す。誰もいない。

「母さんいるー?」

「どうしたの、オヤツ?」

「ううん。なんか、図書室の前を誰か通り過ぎていったから。母さんかなと思って」

居間にいた母はテレビを見ながらランニングマシンで走っていた。間違いなくさつき足音の足音は母ではない。

「図書室の前を?」

母がマシンを止め、テレビも消して正一郎と向き合う。

「いま家にいるのは私と一郎ちゃんだけのはずよ。之ちゃんは遊びに行ってるし、奈々は友達の誕生会だし。可哀想なお父さんは休日出勤だもの」

「じゃあなんだったんだろう、あの足音。まさか泥棒とか」

「まさかあ。八咫姫様が守ってる我が家に泥棒なんて入れやしないわよ」

タオルで汗をぬぐいながら笑う母に正一郎も「そうだよね」と頷く。八咫姫が守るこの家に、悪意を持った外部の者が入るはずがないのだ。

「気のせいだったのかも」

正一郎は台所から麦茶と煎餅を何枚か皿に取り、元居た部屋に戻る。三兄弟で共有の図書室は紙の匂いに満ちていて居心地が良く、百年以上前に書かれた古い本からつい最近発売された漫画まで揃っている。いま正一郎が読んでいるのは、彼の家が会社を興すきっかけとなった出来事が書かれた本だ。この本には少年漫画に出てきそうな話が「実話」として書かれており、読むたびワクワクする。

「やっぱ八咫姫様ってすごいや」

図書室よりも奥の方向に顔を向ける。——顔を向けたところで正一郎には透視能力などないので本棚しか見えないのだが、正一郎が見る方向には八咫姫の部屋があるのだ。

八咫姫は格好良い。なにしろ三つ目、額に第三の目がある。正一郎も額に目が欲しい。額に第三の目があれば学校でヒーローになれること間違いはない。

正一郎たちの守り神だから、神通力でこの家を結界で覆っているらしい。凄く格好良い。正一郎は弟と一緒に毎日修行しているからそのうち結界を作れるようになるはずだが、父は何故か生温かい目で正一郎や弟を見ている。ちなみに父は結界を作れない。ザコキャラなのだ。

そして千里眼を持っている。ぼんやりと全体を見るなら半径三十キロ圏内が見える範囲で、条件を絞ると日本全国どこでも見ることができるらしい。八咫グループの社屋がある場所の周辺なら海外でも薄っすら見えるとか。間違いなく強い。

第三の目が欲しいし、結界を作れるようになりたいし、千里眼も欲しい。正一郎は小学校を出たら八咫姫に弟子入りして良いと父から許可を貰っている——どうしてか父は優しい目をして正一郎の頭を撫でたけれど。

再びソファに埋まりながら本を読み、二時間近く過ぎたろうか。正一郎の耳に電話のコールが届いた。一階の親機と二階の子機が曲を奏でている。どうせ母が電話を取るだろうからと放っておけば、やはり母が電話を取った。

「はい、もしもし——え、八咫姫様？ 何故外に？ 姫様の弟が、はあ。お迎えを？ え？ ちよつとお待ちください、弟つてもしかして」

正一郎はバネのように跳ねて立ち上がり、走った。

八咫姫の九人いる弟妹——まさか見つかるなんて。それも正一郎が家にいる時に！

これから何か起こる。正一郎は瞳を輝かせながら階段の手すりを滑り降り、百点の着地をした。

漏れ聞こえた通り、八咫姫の九人いる弟妹のうち三人が一度に見つかったらしい。あと一時間もせず帰宅するだろう正一郎の弟妹に説明する係が必要だからと留守番を頼まれ、八咫姫とその弟たちを迎えに行った母が帰るのを待つ。電話口で、八咫姫は弟たちについて「酷

い目に遭わされたせいで恐ろしい見た目になってしまっているが、兄弟想いの優しい子たちだから安心してくれ」と言っていた。八咫姫の弟なら正一郎にとつての大祖父のようなもの、多少見た目が怖くても身内だからきつと平気だ。

母が出て五分も過ぎない頃から尻がそわそわとし始め、時計をちらちらと見ながらお菓子の準備をする。すぐお茶を淹れられるように瞬間湯沸かし器に水をセットし、人数分の湯飲みなどを台所に並べる。あと何分で帰ってくるだろう。もう母が出てから二十分だ。まだ帰って来ないのだろうか。

母が出てから四十分ほど過ぎ、家のチャイムが鳴った。インターホンを駆けよれば映っていたのは双子の弟、その弟の後ろには妹がいた。

「なんだよ、正之と奈々かよ」

『なんだよってなんだよ。鍵開けて』

家に入るや洗面に真っ直ぐ向かった二人が、手洗いうがいを終え居間に入ってくる。

「ただいまあ母さん」

「ママただいまー」

ソファに戻り座っている正一郎を見もせず台所に向かって声を張り上げた二人に、正一郎は「母さん今いないよ」と言つて対面のソファを指さす。

「まあ座れよ」

「なんで母さん居ないの？ 買い物？」

「なんか正一郎お兄ちゃん変だよ。何かあつた？」

とりあえず説明するから座れよ、と二人を正面に座らせて、正一郎は一度唾を飲み込んだ。

「母さんは八咫姫様と——八咫姫様の弟三人のお迎えに行っているんだ」

目を丸くした二人が口を開こうとしたその時、家のチャイムが鳴った。玄関の開く音がして母の声が廊下に響く。

「ただいまー」

正一郎が飛び上がるように立ち上がり玄関に向かえば、弟妹も遅れて走りだす。

「おかえり！」

母と、八咫姫と——その後ろに並んだ、ツインテールの兄ちゃんに全裸系芸人、進化をあと一回は残しているだろう四足歩行人類(?)。正一郎は三人目に特に心躍らせた。ゲームや漫画では、醜い奴が進化すると超絶美形になる。正一郎はそういうことも知っているのだ。

「俺、正一郎！ 貴方の名前は!?!」

そう言つて満面の笑みで血塗に飛びついた正一郎の姿に、脹相と壊相は目を見開いた。まさか一番人間らしい見た目をした脹相ではなく、一番人とかけ離れた姿の血塗に飛びつくなど。

「おれ！ おれおれ正之！ ねえ兄ちゃんたち八咫姫様の弟って本当!?! あの『奪われた九人の弟妹』って本当か!?!」

正之は正之で、血塗一人ではなく脹相ら三人を見比べ、壊相の指先を躊躇なく掴んだ。——芸能人に壊相と似たような恰好をした色物がおり、正之がその芸能人を好きだったためだとは、今の脹相らが知る由もない。

「ちよつと！ お兄ちゃんたち！ お爺様たちが靴脱ぐの邪魔しちゃ駄目でしょ！ ごめんなさい、兄が失礼しました。すぐお茶を用意しますね！」

まだ小学校中学年だろう年齢の奈々が兄二人を叱りつけるのは良いだろう、だが、いかにもな見た目をした血塗を見て悲鳴を上げないのは予想外だった。

——奈々が三人を怖がらなかったのには理由がある。八咫姫を祀るこの家の女兒は「八咫の姫」だ。家族以外の者、八咫グループの社員らなどの一部はこの「八咫の姫」を八咫姫と呼んでいるものと思っ

ている。
呪いとは、想いであり、願いであり……胸を満たす感情によるものだ。八咫の姫を八咫姫と混同する者が増えれば、それはある種の「呪い」となり現実に影響を及ぼす。

八咫の姫には第三の目がある。

八咫の姫には神通力がある。

八咫の姫には千里眼がある。

奈々には第三の目はないが、呪霊を視認でき、ある程度までの強さの呪霊を祓える力を持ち、ある程度の範囲内であれば遠くを見通せる。

兄らが持たない力を奈々は生まれた時から持つている。もっと恐ろしく禍々しいものを見慣れた奈々は、血塗の見た目を恐れたりしない。

なにより彼らは視認した瞬間飛びかかってくる呪霊とは違っていった。正一郎や正之の言動に戸惑う、心が傷ついた「ヒト」だった。そして、八咫姫が探し続けてきた彼女の弟だ。奈々が三人を恐れる必要がどうしてあるだろう。

「お帰りなさい、さあどうぞ居間で休んでくださいな」

居間の方へ促すように腕を開いた奈々を見て、八咫姫がにっこりと微笑んだ。

特級呪物『両面宿儺の指』。四つの目と四本の腕を持った——人間の、計二十本の手指だ。

そのうち二本を飲み込み体内に取り込んだうえで正気を保っている虎杖悠仁はまさに千年に一人の逸材、高校に入学したばかりの十五歳という幼さで『執行猶予付きの秘匿死刑』が決まった。

全ての両面宿儺の指を取り込み、指と共に死ぬ。人としての心を前世で捨ててきたのかと疑いたくなるような呪術界の決定はこれでも、悠仁の担任教師となる五条悟の尽力によりだいぶ条件が緩和されたものなのだ。五条の手配がなければ即死刑だったのだから。

虎杖悠仁は一般家庭で育ち、呪術の界限での常識を知らない。彼には先ず、決してしてはならないこと、触れてはならないことを教える必要があった。

それは悠仁と同じく地方出身で東京の事情に詳しくない釘崎野薔薇にも。教えるべきは東京に暮らす呪術師、呪詛師の両方にとってのアンタツチャブル——陣野一族。

四月から東京呪術高専に入寮していた伏黒恵を除く悠仁と野薔薇の二人にとって、これは初めての上京だ。本日の目的地への道すがら、悠仁、野薔薇、恵の呪術高専一年生三人に、銀髪メカクレ軽薄高身長という要素を詰め込んだ不審人物ならぬ五条悟は丁寧に説明を始める。

「東京都内の、特に渋谷駅から北西方向にある住宅街は呪術師も呪術師も——ああ、呪術師って言うのは簡単に言えば『自分の為だけに呪術を使いたいから人助けなんてやーんぺっ^^ うひよひよ人殺したのしー!』って、他人の迷惑顧みない呪術使いのことね。呪術師も呪術師も大人しくするしかない土地なんだ。なるべく渋谷には近づかないようにね」

「なんで!?! 渋谷とか原宿とか観光する気満々だったのに!」

田んぼか家か山しかないような土地で育った野薔薇は、呪術高専で支払われる給料で東京を満喫する気だった。渋谷は東京の代表的な場所だ。行くなど言われても困る。禁じられても行く、絶対に行く。「東京と京都……歴史ある呪術師一族のほとんどが暮らすこの二都府以外では知られてないけど、渋谷に居を構える陣野一族から呪術関係者は嫌われているんだ。特に、加茂っていう一族は滅茶苦茶憎まれる」

陣野家は、かつては東京都内においては二十三区の土地の三パーセントを有していたほどの地主であり、都内に限らず山林から住宅地から様々な土地を今も所有している。また、明治時代初期に陣野嘉右エ門が興した『三眼電機』を祖とする八咫グループは戦後の財閥解体後も規模拡大を続け、今では医療から重工業まで様々な業種のグループ会社を持つ世界的企業だ。

八咫グループには野薔薇もこれまでお世話になって来た。家電製品、農業用機械、除雪機等々。悠仁の家にも八咫のロゴ入り電子レンジなどがあった。誰にとっても身近で聞きなれた名前だ。

「加茂家はその八咫グループに何かしたってことか? クソみたいな性格の奴がいて、そいつが八咫グループの人に呪霊をけしかけて遊んだとか。そういうことをするいじめっ子いるだろ」

そういう虐めをするのは小学生や中学生だけではない。大学生や社会人になり世間を知り一般常識を身に付けた後でも、ただ自分が楽しいからというだけで人間の屑と呼ぶべき所業を犯す者は幾人もいるのだ。

子供がやったにせよ、大人がやったにせよ、質の悪い行為に陣野家が怒髪天で呪術関係者を身辺から締めだした——あり得る話だ。

「いや、そういう事実はない。でも陣野家が呪術関係者を嫌っている理由は分かっているよ。呪術関係者に対して誘拐犯とか強姦魔、拉致監禁している十人の身内を返せって、陣野家は百年ほど前からずっと同じことを言ってるんだよ。でも百年前の当時、加茂家にも他の家にも陣野から浚われてきた人なんていなかったし、今もない。冤罪だと思っただけどき……全然聞く耳を持たないんだよね」

陣野家が加茂家その他呪術関係の一族に対し「誘拐した十人を返せ」と言い出したのは百年前だ。今も同じ数の「十人を返せ」と言っている。もし本当に百年前に陣内家の十人が誘拐されたとして、とつくに死んだだろ彼らについて「返せ」と言い続ける理由が分からない。

十年以上前だが、一般家庭出身で呪術の一族ではないからという理由で夏油傑——五条の親友だった青年——が陣野家にアポイントメントを取ろうとしたことがある。結果は惨敗、「無関係の君を使うとは、君を選んだ人は頭が良いね。加茂家によろしくと言っておいでくれ」と掃きだされた。

お茶漬の素を渡されて帰って来た夏油を見て「京都人より京都してるね」と家入——夏油と同じく五条の同期——は呆れ、五条もそれに頷いた。いけずの極みやな。

「世代で伝言ゲームミスったとかそういうのじゃないの？ 百年前って言ったら大正とか昭和とかあたりでしょ、十人も誘拐なんてしたら事件よ。新聞記事になってない方がおかしいじゃない。その陣野って人達、何か思い込みしちやっってるんじゃないの」

野薔薇の発言に、三人とも頷いた。

「誤解だとしても陣野家が呪術関係者を嫌っていて、拒絶している。

渋谷にいるのが陣野一族に見つかったらリンチ待ったなしだし、奴らはほぼ十割の確率で呪術師や呪詛師を見つけ出す謎の技術を持っているんだ。だから近づかないのが一番、分かった？」

——誤解だと思われていた。加茂家が陣野家から十人も誘拐した事実は無く、事実無根の冤罪だと誰もが思い込んでいた。

夏油の皮を被った「誰か」が民間人を巻き込み、ハロウインのため人が溢れる渋谷に帳——結界——を張ったとき、三体の濃い気配が渋谷駅前に見れた。

気配は五条も知る特級呪物、呪胎九相図のそれだ。呪胎九相図とは明治初期、加茂憲倫が呪霊の子を孕む特異体質の娘に妊娠と墮胎を九回——もしくはそれ以上の回数繰り返させたことで生まれた、現在九つ現存する、直径七センチもない胎児らの遺体の総称をいう。

初夏に行われた京都呪術高専と東京呪術高専の交流会初日、夏油や夏油と目的を同一にする呪霊らが東京高専を襲撃そして奪取した呪胎九相図の「一番」「二番」「三番」つまり「脹相」「壊相」「血塗」。それらが渋谷に持ち込まれた。否、持ち込まれたのではない、肉体を持って現れた。

呪胎九相図の名は仏教絵画の九相図による。野外に打ち捨てられ腐るに任せた死体の経過を九段階に分けて描いている。

脹相——ガスにより死体が膨張する様。

壊相——腐敗が進んだことで皮膚が割れ、破れる様。

血塗相——腐敗し液状化した内臓等が体外に溢れる様。

名は体を表すという。名はその人を形作り、縛る。

受肉した当初、脹相と壊相は比較的人らしい姿だったが、血塗はとみに酷かった。脂ぎった赤黒い体液を流す人面と、その顎下にもう一つある巨大な口には乱杭歯。体毛はなく膨らんだ上半身に細い下半身、真っ直ぐ立つことが出来ず前のめりに立つ姿は獣に似ていた。

壊相も背中中の皮が割れ、人面瘡のようなその割れ目から絶えず血が溢れているという姿だった。

名に縛られ、名の表す通りの姿を手に入れた結果だった。ヒトとして生活できるはずもない姿だった。

「チョウソウ、エソウ、ケチズと言うのだが——正一郎、正之、奈々、頼みがある。三人の名前に良い字を当ててはくれないか？」

数か月前、防水シートの上にタオルケットをのせたソファアに三人並んで座った脹相らを、腹を同じくする姉が子供たちに紹介した。

「えー！ じゃあすつごくカッコいい漢字付けて良いの!？」

「もちろん」

「やったあ！ 漢字辞典持って来る、ちよっと待ってて。凄くカッコいい漢字選ぶから！」

「正之、夜露死苦みたいな字は選ばないようにな」

子供たちがより良い意味を持つ漢字はないかと探し——選んだ字のそれぞれが、今、三人の体を作り、縛っている。

「チョーソーは、『澄壮』！ 澄み渡って濁りのない男！ で、エソーは『景壮』で、立派な男。ケチズは『景智澄』。光と智慧を以て澄ます。ケチズはチョーソーとエソーの弟だから、二人と同じ字を入れたよ」

脱皮や羽化をしたわけではない。だが、数か月かけ三人は変わっていった。嬉しそうな顔で字の説明をした正一郎らが三人を変えた。

ずっと弟妹の行方を捜していたという種違いの姉と、脂にまみれた体液を厭わぬ三人の子供たちと、次々チョウソウらに会いに来ては泣いて喜ぶ親類縁者と。人の味方も呪霊の味方もしたくないと考えていたチョウソウの心を揺り動かしたのは「家族」だった。

家族を守りたい。だが、家族だから、親族だから守りたいというわけではない。

実際の所、三人は姉の八咫姫以外の親族とはほとんど血が繋がっていないのだ。八咫姫を引き取った陣野長介は、八咫姫の祖父である太兵衛と十五離れた従兄弟だ。民法では親族とは6親等までを言うが、現在生存している一番親等が近い親族でも8親等、正一郎らは10親等になる。もはや他人だ。

真心を返したい。愛してくれるから、愛を返したい。好きだと思っ人たちを守りたい。

「困るんですよね……我が家の近くでこの様な騒動を起こされては」

「ゲトー、俺たちと遊びたいって誘ってるのかあ？」

普段から明るく夜の無い街はハロウィン当日とあつて眩しいほどだ。ペンシルビルの屋上から眼下の混乱を見下ろしながら、エソウとケチズが冷えた声で呟いた。

「奴らの目的など知らないし、もはや知りたくもないが——親父さんたちが巻き込まれていては困る」

地上の光が届かない奥から——先端へ。中央に長男、次男と三男がその脇を固める。数十メートルは下の地上から届く光に顔を白く輝かせながら、チョウソウは言った。

「ゴミ掃除だ。行くぞ、エソウ、ケチズ」

人の出入りを阻む帳も、半分が呪霊の三人を拒めない。袖をはためかせ宙を舞った三人は、何に阻まれることもなく渋谷駅へ向かう。家族が巻き込まれているかはまだ謎だが、問題の源を放置しては近々巻き込まれること必定。人のごった返す道を行かず街路樹や街灯を足場にしつつ、三人は中心部へ走る。

呪詛師と呪霊、呪術師の対立構造に——今、第三勢力が侵入した。

ミーム汚染という言葉があるように、同じ言葉を聞いたとしても、各々の持つ知識や常識によって同じ認識を持つたり、別の判断を下したりする。

例えばだが、戦国時代をモデルにしたゲームが二種類あるとして、片方がムキムキの筋肉ばかり登場するPVPゲーム、もう片方が偉人女体化の脱衣麻雀ゲームだったとしよう。前者に戦国バトル、後者を戦国・麻雀という仮名を付けておこう。戦国バトルしか知らない者に「織田信長は好きか」と訊けば、彼は「うん、強くて好きだよ」と答えた。戦国・麻雀しか知らない者に「信長は好きか」と訊けば、彼は「うん、エロくて好きだよ」と答えた。どちらのゲームも知らない者に訊けば、「昔の人だよな？」さあ、良く分からない」と答えた。ちなみにどちらのゲームも知っている者は「どの信長？」と答えた。信長が登場するゲーム等の創作物はゆうに百を超える。

ミーム汚染とは、自覚を伴わず、言葉や画像などに対する認識が変わってしまうことを言う。知らないうちに思考が塗り替えられる――

—ある種の洗脳だ。

呪胎九相図の三人は、呪霊の子として生まれてから百五十年、呪物として封印されていた。呪術師になるには呪力が足りない窓なども含め、呪術師や呪詛師の数は国内だけで二千人足らず。これは呪術高専の京都校、東京校を合わせても一学年につき十人もいないこと、窓も含め呪術師の死亡率が高いことからして当然の数だ。

—その二千人が「呪物であり、危険な存在だ」と思い込み、念じ、定義づけている「呪胎九相図」をどのようにして浄化すべきか？ 陣野家が取った手段はたった一つだ。善いモノとして一般の認知度を上げれば良い。

今は陣野家の守り神として神格を得ている八咫姫だが、始めの五十年程は呪霊の気配をまとっていた。未来の知識という予言により陣野家——そして三眼電機を発展させてはいたものの、まだ「呪われた存在」だったのだ。

それが変わるきっかけは大正十二年九月、関東大震災だ。予言を信じ被災を逃れた三眼電機社員ら、被災後に三眼電機から支援を受けた民間人らからの三眼電機創業者一族への信頼は高く、新聞記事で社長が「うちには八咫姫という守り神がいて云々」と語ったことにより八咫姫の知名度が爆発的に上昇。震災から二年としないうちに八咫姫は神格を得るに至った。

多くの者が八咫姫を「守り神」だと信じたから神になったのなら、多くの人にチョウソウらを「神に連なるもの」と思わせれば良い。二十人の強い呪力を持つ者達がチョウソウらを呪物だと定義していたとしても、十倍——いや百倍の数の一般人がチョウソウらを神だと信じればどうなるだろう。なにせ日本の人口は一億二千万人いるのだ、不可能ではない。

最初は公式SNS。八咫グループのイメージキャラクター八咫姫ちゃんに弟がいたというアウンスから始まった。八咫姫の下に弟妹が九人おり、八咫姫は十人姉弟の長女だ、と。先にそのうちの三人の名前と設定を公表し、イラスト投稿サイトでエソウとケチズのイラストを公募した。採用されればそれぞれのキャラにつき五十万ずつ

が賞金となる。公式キャラクターイラストとして採用されなくても、優秀作品に選ばれば十万円が手に入る。名前が売れる。

そして、イラストと同時に開始されたのが八咫姫小説大賞。メインキャラでもサブキャラでも良いが八咫姫とその弟たち四人のうち一人を必ず作中に登場させることのみを募集要項として、イラストと同じ投稿サイトの小説部門で公募がなされた。大賞の賞金はイラストと同じく五十万。

知名度が上がれば良いのだ。良い意味の知名度が上がれば、チョウソウらの負を正に転じさせることが出来る。チョウソウと聞いて脹相ではなく澄壯の字を思い出すように、人々の思考を塗り替えるのだ。

「人間社会では顔が良ければ異性を扱きおろしても許されるのですねえ」

人間社会の一般的な認識を学ぶためにエソウらが先ず見せられたのは――クレヨン○んちゃんとかちび○子ちゃんだ。幼児は幼稚園や保育園という施設で同世代の子供と一緒に過ごし、対人能力を磨くようだ。しんのすけが頻繁に母親に怒られているため、「してはいけないこと」を学ぶことが出来る。○子もよく怒られているため反面教師として良い。

他にもドラ○もんやらサザ○さんやらというアニメもあるが、ドラえ○んは「この世に存在しない道具が実在するものと誤解する可能性がある」ため少なくとも半年は禁止で、サザ○さんは「現代の一般家庭とは異なる家族の形態を描いているため誤解する可能性がある」ため同じく半年は禁止だ。その代わりに、スポーツ漫画やアニメはどれも好きに見て良いと言われており、いま三人はテニスの○子様というアニメを見ている。さつき顔の良い部長が観客の女子生徒らを「雌猫」と呼んで扱きおろしていた。

「顔は優劣を付けやすいからな。より良いものを、より優れたものをヒトが求めるのは当然だろう」

頷きつつそう言ったチョウソウに、エソウは「そうですね」と大振りに頷いた。身体能力が優れているかどうかを外見からは判断でき

ず、勉強ができるか——頭が良いかどうかも外見からでは分からない。チョウソウだけでなくエソウもケチズも高い身体能力を有しているが、初対面の他人が見るのは顔だ。顔が判断基準になるのは仕方ない。

この中で一番顔が良いのはチョウソウで、今この兄弟三人を横に並べれば異性は誰もがチョウソウを選ぶだろう。

だが。

——イラストの公募が終われば、エソウとケチズの容姿は大きく変わる予定だ。キャラクター公募の際、概要にエソウは「黒髪でモヒカン、筋肉質の大男。一人称は『私』」、ケチズは「スキンヘッド。性格に獣じみたところがあるが口調は緩い。一人称は『俺』」とだけ書かれた。これだけの情報からどのような容姿が生まれるのか、エソウもケチズも楽しみにしている。もしかすると兄よりもイケメンになるかもしれない。

様々な人がエソウとケチズの容姿をどのようにするか悩み、思い描き、情熱を傾けている。募集の締め切り日までまだ二ヶ月以上あるが、既にエソウらの体は組み変わり始めているのだ。絶えず溢れていた血が止まり、エソウの背中の人面瘡は薄れ始めた。ケチズは更に変化が顕著だ。落ちくぼんだ目にはだんだん肉が盛り上がり始め、乱杭歯は整列し、溶けていた鼻もこけていた頬もふつくらとしてきている。風船に手足を生やしたようだった体には首が、肩が、胸部が、腹が——体の各部位がそれぞれ独立して明確になり始めている。

この調子なら、チョウソウらの体を巡る力は一年とせず呪から祝に変わる。低位ながら神格を得る。大切な相手を守る、守り神になれる。

「あと数カ月もすれば私たちの容姿が定まります。私とケチズも、跡部のように異性を『雌猫』と呼んでも歓声を上げられるような男になるはず。兄者よりイケメンになるかもしれないよ」

「そうになったらどうするかなあ。困っちゃうなあ……俺、女より猫の方が好きなんだあ」

心底困ったと言わんばかりの顔をしたケチズの頭を、チョウソウが

笑いながら小突く。

「気が早いぞ、ケチズ。そういうことはイケメンになってから悩めば良いだろう」

「ああー。そっかあ、兄者の言う通りだあー！」

——まだ公募の締め切りは来ていなかった。

——まだ三人とも、体内を巡る力は呪に傾いていた。

——まだ彼らが神格を得るには様々なものが足りなかった。

——いまだ、呪霊と同一視される存在だった。

十月三十一日、多くの人がハロウィンに沸く日。あと一押しが足りない三人は、それでも渋谷駅に走った。大切な人たちが巻き込まれたかもしれない。大切な人にとっての大切な人が傷つけられているかもしれない。だから、渋谷を監視し続けるため動けない状態の姉に言ったのだ。

「姉者、俺たちのできることをして家族を守りたい」

「私たちも姉者の力になりたいのです」

「俺も出来ること増えたんだぞお」

口々にそう言う三人に、彼らの姉は三つの目を瞬かせた。そして嬉しそうに微笑む。

「お願いしても良いか——私の守るべき子らを」

渋谷周辺の巨大液晶画面が切り替わる。一定時間ごとに表示されるようシステムされている企業名、CM等は一斉に途切れ、代わりに映ったのは三つ目に三本足が生えたシンボルマーク。八咫グループのコーポレートロゴだ。

まるで生き物のように眼下を見回すロゴに、しかし人々は気付かない。見えない壁に閉じ込められているという現状により、視覚狭窄に陥っている。

目の指し示す方向に走りながら、三人は自らの目でも眼下の人々を確認する。大切な人にとっての大切な人を取りこぼすことがないように。悪意が彼らを襲わないように。

三人に自覚は無かったが、もはやその姿は悪意の子のそれではなく、祝福された者の——愛された子のそれだった。

羽化の時は、今。

八咫姫は現在陣野家を束ねる当主の家で暮らしているが、八咫姫の住まう家が陣野家の本家——というわけではない。彼女は「一族のなかで最年少である娘がいる」家に住むのだ。理由は単に、術を教えるためには同居の方が便利だから。

陣野の娘は生まれたとき、朱で額に三つ目の目を描く。その子が呪術師や呪詛師によって連れ去られないように。おとよの悲劇を繰り返さないように。神通力をその身に宿しますように。

このためもあつてか、人により方向性に多少の差異はあるが、陣野家に生まれる娘は必ずとある能力に目覚める。後方支援に特化した、前衛を強化し敵を弱体化させる特殊能力。——ゲーム的な表現を用いるならば、彼女らはバツファーなのだ。

この能力なくして渋谷近辺の治安を守ることが困難だ。呪術師や呪詛師らを陣野の男達がタコ殴りにできるのは女性陣によるバフ・デバフがあればこそ。術式が使えなくなるよう弱体化させられた敵の皆様は哀れ、バフを掛けられ凶悪になった陣野家の熱い拳でリンチされる。だが一方的な私刑を受けた呪術師も呪詛師も特殊な凶器を所持していることがままあるため、大抵の場合、陣野が主張する正当防衛が認められる。お陰さまで陣野の男は老いも若きも筋肉質だ。

なお、リンチから無傷で生還した呪詛師は一人だけいる。バフ重ね掛けの三十代から七十代マッチョメン五人とたった一人で渡り合い、何故か最終的に駅前呑み屋で仲良く打ち上げをして帰っていった。今でも頻繁に渋谷駅付近の呑み屋で呑み会をしているうえ家にもホイホイ着いてくる。快樂主義の呪詛師の中では肝の据わった野郎だ。ところで。八咫姫はこれらの私刑の際に何をしているのだろうか。

だが実際はそうではない。彼女は呪術師や呪詛師らの侵入がないか常にその千里眼を用いて地域全体を監視しており、もし侵入があれば男性陣に場所や人相などの連絡をし、また女性陣のバフを男性陣に届ける中継器の役割を担っているのだ。

ゆえに、八咫姫ほか陣野の女は動けない。

畳敷きの八咫姫の部屋には梁から布鈴緒——赤白紺の三色の絹布を編まずに垂らしたものが垂れ、その布の端を握る陣野の女たちは誰も額に朱で描かれた目を開いている。

人で溢れる渋谷が帳に閉ざされるなど陣野家の者にとつては空前絶後と言うべき大事件。誰がやったかは分かっている。チョウソウらを受肉させた夏油とその仲間の呪霊だ。だが夏油らは何故、何のために帳を下ろしたのか？ 分からないから、いつ何が起きても良いように全力で対応する。

——渋谷駅周辺の電光掲示板の上では三つ目がギョロギョロと動いている。陣野の者が誰かいないか。帰宅途中だった者はいないか？

いた。陣野の男だ。車で帰ってきていたのが立ち往生し、仕方なく車を出たようだ。まだまだ若い四十代前半、正一郎らの叔父にあたる。そして運転席から下りてきたのは免許を取ったばかりの彼の従弟、やはり陣野の男だ。八咫姫の部屋には彼らの母達や祖母もあり、二人の顔を確認するや「でかした」「よし」「おまんがヒーロー」と歓声を上げた。

先に年若い男、信正が電光掲示板に気づいた。従兄の正輝に声をかけて上を指差す。じつと自分達を見つめるコーポレートロゴにハツと目を見開いた。

「信正、拡声器を使え。避難誘導だ」

「あいよ。どこに誘導するよ？」

「地震じゃないなら建物の中で良いだろう。スクエアならここから近い。フロアも広いから、これだけの人数がいても余裕で入るんじゃないか？」

「りょーかい」

運転席に戻った信正が取り出したのは無線の拡声器。信正は車の上に軽々と土足で飛び上がるや、足元にスピーカーを置いてマイクを握った。

「あつてんしょんぷりーず。こちら八咫グループです。現在原因不

明の混乱が生じておりますが、皆様が地上におられますと人口密度が高くなり、とても危険です。とりあえずスクエアに入ってください。こちら八咫グループです。とりあえずスクエアに避難してください。地上が大変混雑しております。寒い格好をしている皆さん、スクエアなら暖房が効いていますのでスクエアで暖まってください。こちら八咫グループです」

今は何をすべきなのかすら考えられないほど混乱と不安で思考が鈍化していた人々の耳に、八咫グループを名乗る信正の声は天啓のように届いた。とりあえず暖まりに行けば良いんだ。とりあえずスクエアに行けば良いんだ。とりあえず。

「スクエア内では各フロアに分散しましょう。一階に留まると後続が詰まります。スクエアに入られましたらエスカレーターで上の階を目指してください。一階に留まらず、エスカレーターで上を目指してください。この原因が判明し、事態が解決するまでしばらく掛かると予想されます。暖かい場所でお巡りさんを待ちましょう」

人々がざわざわと動き出す。とりあえずスクエアに入って、待とう。言われてみれば確かに外は寒い。

信正と正輝の二人は案内を十分も続けたらうか、道路を覆い尽くしていた人混みはほとんど消えた。

広い空白ができたそこに上から三つの影が飛び降りてくる。とつさに身構えた二人だが、大男二人に挟まれた中背の男の姿を見て警戒を解いた。見上げるような大男を従えているのは、少し癖のある剛毛を二つ括りにした塩顔——チョウソウだ。大男の片方はエソウか？

しかし髪型や基本的な造作こそ以前と変わらないが、美化300%と言おうか、漫画で言うならモブ顔から準主役級のイケメンになったような違いがある。

「そつちはエソウ、で良いよな?。」
「そうですよ」

チョウソウの右にいるムキムキの美男がエソウなら、左にいるのはケチズだろう。ケチズは——見た目が物騒になっていた。スキンヘッドは変わらず、笑んだ口元では鋭い八重歯が目立つ。太い首、広

い肩、裸の上半身は筋骨隆々としており、パンチ一つで人を殺せること間違いなし。正輝の脳内でスイカが汁を撒き散らしながら割れた。

「じゃあ左のラオウか烈海王みたいなのはケチズか？」

「ああ、そうさあ」

世紀末伝説から出てきたようなこの男がつい数か月前まではハンブレイクとカオナシを合体させたような異形だったなどにわかには信じられないことだ。昨日の時点でも首らしき括れがあるハンブレイクだったのに……たった半日かそこから姿が変わりすぎではなからうか。

アヒルの子も驚きの大変身。

「情報を擦り合わせたい。どういう目的でスクエアに人を集中させた？」

チヨウソウの問いに答えたのは正輝だ。

「見えない壁に閉じ込められた。出られない。といった話し声が聞こえたので、帳に閉じ込められたものと考えた。俺たちを狙ったにしては襲撃されないことから無差別の犯行だろう。守らねばならない対象がバラバラに散っているよりまとめておいた方が楽なので、収容人数がここらで一番多いスクエアに誘導。出入り口を我々で固めれば良いという判断だ」

「分かった。こちらは渋谷に大規模な帳が下ろされたことを確認した姉者の指示で、身内が駅周辺にいる場合の保護と犯人どもの抹殺のためここに来た。正輝と信正には人々の誘導と、スクエアにいる人々を外敵から守るのを頼みたい。ケチズをそちらに付けよう」

「分かった。敵の抹殺は頼んだぞ」

「りよーかい。ケチズちゃん昨日ぶり。マジでやべーゴリマッチョになったね」

ふつふつと腹の底から湧き上がる力を感じ、五人揃って上を見上げる。数えきれないほどのコーポレートロゴは複数の電光掲示板を縦横無尽に走り回り、目を皿にして人々を確認している。その一つが五人をじつと見つめていた。目で繋いだ線と血の繋がる縁を辿った、女たちによる支援——バフだ。

神もどき二人と、人類二人に神もどき一人の二組に別れる。誰かが乗り捨てていった二人乗りの大型バイクに正輝とケチズ、原チャリに信正がまたがる。

これは緊急避難なので他人のバイクに乗っても罪ではない、そういうことにしよう。免許を持っていないケチズに運転させないだけマシだろう。

ケチズが後部座席でスピーカーカーを掲げながら「困ってるならスクエアに行けー。とりあえずスクエアに逃げろよおー」と唱え、正輝はバイクを右へ左へと走らせる。できるなら遠くにいる人々もスクエアに回収しておきたい。二人の後ろを走る信正も、ホイッスルをビリビリと吹き二人に注目が集まるよう動いている。

できることはやった。駅や電車内、他のビルにいる人々を助けるには戦力が三人だけでは足りないし、そこまで責任は持てない。また、三人にスマホを向けてゲラゲラ笑っている馬鹿についてはどうなるうが知ったことではない。三人のできる範囲のことはやったのだ。

スクエアの正面入口、ガラスの自動ドア前に立つのは正輝だ。情報を擦り合わせる時間がなかったため、正輝は「敵」がどのような存在か分からない——呪詛師だろう。もし百鬼夜行を率いた呪詛師であればガラス張りの壁など破って中に入れてしまう。だがこちらには三人しかいない……人数不足にも程がある。次々ビル内に入っていく人々を一人一人確認しながら、正輝は足元に置いたスピーカーカーの音量を最大にして「とりあえずスクエアの中に入りましょう。一階に留まらずエスカレーターで上に行きましょう」というアナウンスを繰り返す。スピーカーカーの電池はいつまで保つやら。

その地下。三つ目のコーポレートロゴの指示に従い駅と繋がった地下空間に立つのはケチズと信正だ。駅から逃げてきた人々がケチズの姿に目を剥きまた引き返そうとするのを信正が呼び止めてはスクエア内に誘導する。信正の負担ばかり大きいように見えるが、ケチズが威圧しているからこそ呪詛師や格下の呪霊がこの周辺に近寄らないのだ。

駅の方から禍々しい呪力の高まりを感じる。自分も参加したい、兄

達と共に戦いたい。だがケチズの任務はビルの人々を守ることだ。前線で暴れまわることはない。

兄二人の無事を祈りながら、ケチズは筋肉を隆々と膨らませる。大きいこと、強く見えることは大事だ。ケチズは兄二人を、姉を守る強さを求めた。

長男のチョウソウは男三人の中で一番呪力が大きく、術式も利便性が高く強い。強いのだが、ひよろりとしていて力強さより速さ、腕力より術式を優先した体格だ。

次男のエソウは体格が良いが、見た目を裏切つて動きがしなやかで柔軟性がある。体格に任せた無頼漢ではなくストリートもカウntaxーも得意な頭脳派なのだ。術式も使いやすいもので、兄弟の血であれば誰の血でも活用できる点は特に素晴らしい。

長姉の八咫姫は強さの方向性が違う。サポートに特化した術式はなるほど神の一柱というだけあり桁外れで、長姉が届けるバフは今もケチズを温めている。

ケチズに術式はなく、呪力も一番低い。もしかすると単に術式に目覚めていないだけかもしれないが、現状においてケチズは「これ」という術を持たない。代わりに、今にも口から溢れそうなほど身体の中で血が滾り、細胞一つ一つに栄養と酸素を届けている。

ケチズは力を求めた。力が欲しいと願った。持つているかも分からない術式に無駄な期待を寄せず、ひたすらに力を望んだ。それが今の姿だ。姉や兄の壁となれる大きな肉体、相対するもの全てを打倒する筋肉。ふうーつと吐いた呼気は白く、すぐに空気に溶けて消えた。

駅の中に人が吸い込まれていったんだ——栓を抜いた浴槽みたい

に！
見えない壁を叩きながら、きつと犯人からのものだろう伝言ゲームで伝播した「五条悟を出せ」というセリフを繰り返す者達を街灯の上から見下ろす。どうやら犯人たちは人質を取ったようだ。とチョウソウらは頷き合つて境界を離れ、陣野の二人と合流した後、チョウソウとエソウは駅へ走った。

副都心線渋谷駅を囲っているのは、渋谷駅周辺を囲んでいるのと同じ一般人を閉じ込める性質を持つ帳だ。が、二人は人間の肉体を持つた『呪霊』だ。出入りに困難はない。

しかし一階に人の姿はない。地下一階に下りたがやはりいない。地下二階、いない。地下三階、いない。八咫のコーポレートロゴは地下一階から三階まで瞳を閉じている……敵がいらないということだろう。

「まだ柔らかい。殺されてからそう時間が経ってはいないな」

「ご冥福をお祈りいたします……」

地下三階に、食い荒らされた跡があった。壁を染める血はまだ鮮やかに赤く肉も柔らかい。一瞬の黙祷。地下三階で被害があったなら地下四階はどうだ？ 急がねば犠牲者が増える。

地下四階のロゴは奥を見ていた。この先に敵がいる。

「醜い怪物ですね」

「一応あれでも人間のようだが——犯行はショッカー軍団によるものか？」

いま二人の目の前にいる怪物は上半身が巨大な赤ん坊のように肥大化しており、人間時代には身に付けていたはずのスーツの残骸が肉に埋まっている。赤ん坊のような甲高い声で意味をなさない言葉を発しつつ人を襲っているソレにエソウが出合い頭の蹴り。強度が低かったのか怪物は簡単に弾けた。

「弾け方が胡麻擦り団子みたいだな」

「止めてください兄者、これから胡麻擦り団子を食べる気を無くしてしまいそうです」

その場にいた被害者三人組の女性のうち二人は五体満足で無事だった。——残念ながら一人は首があらぬ方向に折れ曲がり、誰が見ても死んでいると分かる姿だ。

一瞬だけエソウと視線を交わせば領き、エソウだけ先行する。一分一秒が惜しい状況だ、二人ここで止まるわけにはいかない。

「今は足腰が立たないかもしれないが、這いずってでも上へ逃げろ。俺とあいつは化け物退治に忙しいからお前たちを上へ連れて行くこ

とは出来ない」

スクエアを目指せ、と女二人に言い聞かせてチヨウソウもその場を離れる。「嫌だ、助けてよ!」「どっか行かないで!」という悲鳴が背中を叩いたが、たった二人のために数千人を見捨てるなどという馬鹿らしい行為をするわけもない。

エソウに追い付けば男女が三人騒いでいた。肉塊になった怪物らとエソウを交互に指さして「人殺し」と怒鳴っていた。聞くだけ無駄だと無視してその場を離れる。

そして——バツタの呪霊がスーツ姿の男に食いつこうとしていたところにギリギリ飛び込んだ。

やはり敵はショツカー軍団らしい。改造人間にバツタの怪人、惜しむらくはバツタの怪人が正義の味方ではなく敵役であることか。おそらくは蝗害の恐怖から生まれた呪霊であろうから細かいことを言うとはバツタではないが、まあ似たようなものだ。

「おいあんた、上へ逃げろ! 今はまだ見えない壁があるせいで外には出られないが、地下三階から上に怪物はいない!」

「へ? え?」

「邪魔だと言っているんですよ。さっさと上へ逃げて頂けませんか」

何が起きているのか分からない様子の男に二人でそう畳みかけ、背中を軽く押して階段の方へ向かわせる。男はエソウらを何度も振り返りながら早足で去っていく。

「ななんなんなんだよ? オマお前じゅじゅじゅ……じゅじゅじゅじゅ呪術師かア? いや違うなア、俺には分かるんだ。俺は賢いんだ。何で邪魔する?」

「呪術師などというおぞましいものと同じ視されたくはないが、お前と同じ視されるのも嫌だ」

「美しくありませんよ、あなた」

バツタの怪人はスリコギのような声音でチヨウソウをエソウをぎりぎり詰る。

「お前ら呪霊だろオ? マヒトが帳守る俺に仲間呼んだのか? 邪魔するのなんでだア?」

マヒト、帳を守る仲間。床に打ち込まれた杭から感じる呪力はなるほど、ここ一帯に張られた帳に関係する呪具なのだろう。

「状況はだいたい分かった。礼を言う——だがお前の仲間になった覚えはない」

チョウソウが両手を叩き合わせて撃ち出すのは赤血操術「穿血」。血を弾丸のように発射する技の一つだが、発射後においては鞭のように振るうことも可能。直径数ミリの鞭は狙い変わらずバツタの怪人の額を撃ちぬいた。

エソウが呪具を蹴りつけ壊した瞬間、足元の帳が解けていく。

「——行くぞ」

地下四階で逃げまどっていた人々には上へ行くよう指示し、地下五階。副都心線のホームには一般人らが寿司詰めになっている。白髪の男が呪霊二体と切った張った——逃げられずにいる一般人らは雪山の猿のように体を寄せ合い、見えない何かによって殺されないように目を血走らせている。

空気を踏みしめて眼下を見下ろし、チョウソウが声を張り上げる。

「注目！」

チョウソウらを見た人々に、歓声に似たどよめきが広がる。人が宙に浮いている。マジックか？ ワイヤーアクションか？

素直に自分たちに注目した人々に満足感を覚えながら、チョウソウは張りのある声で上へ向かうよう伝える。それと同時に構内全ての電子掲示板が八咫グループのコーポレートロゴと上へ向かう矢印マークを表示した。そしてコーポレートロゴを尻で押しつけるようにしてイメージキャラクターの八咫姫ちゃんが現れて両手の人差し指を立て、笑顔で上を指さした。

「上の階にいた怪物は我々で倒した。現時点ではまだ地下一階に見えない壁があるが、そのうち壊されるので心配する必要はない。我々は渋谷を見捨てない——安心してほしい」

「見えない壁が消えたらスクエアに向かってください。スクエアに我々の仲間がいますから、スクエア内で救助を待ってください」

頭部が山頂のような呪霊、漏瑚がバツと階段——チョウソウらの方

を振り向いた。

「呪術師の増援?……貴様ア脹相か! 貴様が何故ここにツ……帳を解いたのも貴様だな!」

人が次々と階段で、エスカレーターで上へ消えていく。帳を解いたということとはつまり、呪術師の侵入を阻むものが何も無いということだ。上へ向かえば呪術師らが一般人を保護するだろう。

漏瑚の罵声に白髪の男、五条悟がにやりと笑んだ。

「知り合いにしては敵対してるみたいね。まあ今は敵の敵は味方つてやつ?」

五条悟の言葉にチョウソウは顔を盛大に歪める。

「味方? 気色悪いことを言うな。殺し合いなどそつちで勝手にやっている……俺達の目的は人命救助だ」

「もちろん騒動の元凶を抹消するのには助力しますよ。そうじゃないと私達が来た意味がない。でも、我々が貴方の味方だなどとは思わないことだ」

床に降り立った二人に、柱から迫る影があつた。細く小さい。女だ。黒髪と、その後ろに金髪。どちらも女子高生らしく制服を身に付けている。黒髪が美々子、金髪が菜々子だ。

「死ね!」

美々子の手から縄が走り、こちらに飛び掛かろうとする蛇のように真っ直ぐチョウソウに向かう。腕で防げばこれ幸いと捕縛されるだろう、操った血で縄を上へ跳ね上げる。縄の途中を掴んで引っ張るも、美々子は体に呪力を巡らせてどつしりとその場で姿勢を保つ。

「呪霊と呪詛師の同盟対呪術師という対決なのではなかったのですか?」

「見た目で判断した? 残念でした、私達呪詛師だから」

「私達の邪魔をするならここで死ね!」

呪力を巡らせれば人智を越えた力を発揮できる。彼女達の仕事――願いを邪魔している想定外の第三勢力を排除すべく、少女二人はなんらの助走もなくエソウらに向かって飛び掛かる。ホーム柵内部で二対二、線路上で一对二の接近戦が繰り広げられる間にホームからは

どんだん人の姿が消えて行き、漏瑚が口汚く舌打ちをした。

「糞が、このままではッ」

「このままでは——なんだって?」

巻き込まれる位置にいる一般人がいらないではない。今この場では味方と言える相手もこの場にいる。しかし、少数の被害で多数の命が守れるならば。

五条悟は取捨選択した。いや、ここに来た当初から取捨選択していた。多少の犠牲は仕方ない。既に幾人も巻き込まれて死んだ。

ここでこいつらを殺さなければ、被害者の数は百人単位で増える。たった数人廃人にするのと、数百ないし数千人が殺されることと。天秤が傾くのは簡単だった。

——領域展開、無量空処。これは領域内にいる五条悟以外の他者に対し、無限の「知覚」と「伝達」を強制する。分かりやすく言えば、無量空処は自分以外の全員をごく短時間で「宇宙に放棄され考えるのを止めた柱の男」にする空間だ。空間内では無限の情報が舞い、しかしその数多な情報を認識できたとしても何もできない。行動をとれない。

都心ではありふれた見た目の駅のホーム、無機質な地下五階の空間を無量空処が塗り替える。街明かりのない冬空のような、キリリとして澄んだ夜空が広がる。天の星々は眩しく輝き夜空を彩り、その中心に立つ五条悟を照らしている。——それを、一瞬。コンマ何秒だったのか、もしかすると数秒にもなる展開だったかもしれない。

コンクリートと線路が伸びる場所で、漏瑚と目的を同じくする呪霊、花御のすぐ真正面に五条悟はいた。膨大すぎる情報量に呆けていた花御の顔面——人面で言えば目に当たる部分から伸びる木の幹を五条悟は勢い良く引き抜く。花御の口から人語ではない悲鳴が上がる。

「——花御!」

一拍遅れて正気を取り戻した漏瑚が花御に手を伸ばす。その背後から走る弾丸は赤く……咄嗟に軌道から逃れた漏瑚の腕を貫通した。

術師はチョウソウ。真っ青な顔色だが目だけはきらきらと輝き、

しつかりと二本の足で立っている。彼の足元には気を失った少女が二人。

「この、ききッ——脹相オオオ!!」

「お前はもう、死んでいる」

「えっ何？ 北斗の拳読んでんの？ っとなあ！」

チョウソウの決め台詞と同時にエソウが発動したのは彼らの術式。蝕爛腐術「朽」。これは兄弟の血を粘膜ないし傷などにより摂取した者を腐らせる。発動者は三人のうち誰でも良い。なお一番毒性が強い血を持つているのはエソウだ。

漏瑚の腕から広がる腐食の術式はまるで花のタトウーのように肌を彩る。モチーフは薔薇か、カーネーションか。

無量空処で弱ったところに感覚器官も奪われよろめいた花御に、五条悟は迷わず止めを刺す。肉体を持たない呪霊は脆く崩れ消えた。

「そちらの白髪の御仁ばかり気にしてはいけませんよ、漏瑚。貴方はご存じでしょう、我々の得意とするものは『分解』です。骨も残せぬほど溶かし尽くして差し上げます」

「お前、もしや壊相か!? まさか——見た目が違いすぎる」

真つ青な顔色ながらふふと笑む男の姿は、漏瑚の知るそれとは大きく異なる。なにせ歩く不健全と呼ぶべきすっぴんのSMドラマグクイーンが、全年齢対象のスポーツマンになっているのだ。漏瑚の動揺も当然だろう。

「ええ、私がエソウ。立派な男という意味を持つ、景壮です」

エソウは胸を張り、右手をそこに添えた。渋谷に出るにあたり八咫姫が三人に掛けた言葉がエソウの頭に思い出される。

『お前達を腐らせておくのは勿体ない。暴れておいで』

エソウは……景壮は笑みを獰猛に変える。まるで縄張り争いの獅子のごとき表情、捲れ上がった薄い唇から覗く歯は鋭い。

ああそうとも、姉者の言うとおりで。私達は『腐るがまま』にはならない。

「私達は決して脹れない。壊れない。塗れない。腐らない」

「何故なら俺達は——生きています」

チヨウソウの顔を横に走る、濃い血の色をしたインクのようなもの——タトウーではなく赤血球が板状に貼り付いたその色がじわりと変わり始める。ワインレッドだったそれは濃さを増し、じわじわと……もはや赤みがかった黒という色だ。

エソウの背から広がった翼も黒く、まるで鉄筋を編んで作ったアゲハチヨウの羽にも見える。

「肉体すら持たぬ貴方に魂はあるのですか？」

「死人は死人らしく土に還れ」

副都心線渋谷駅、地下五階にあるホーム。呪術師と呪霊もどき——

否、神の末席に足を踏み入れた二柱が共闘する。

「三対一、これは負ける方が難しそうだね」

にやりと五条悟が笑んだ。

この非常時でも、あらかじめ設定されたアナウンスがホームに響く。

六番線に電車が参ります。

口許に傷のある男は、通話相手に自分の居場所を伝える。——ヘリポートのあるビルに移動すつから指示してくれ。区立病院の屋上？

わーつた、連絡はそつちで頼んます。

男は呪詛師だ。アウトローで、根無し草で、金を一発どかんと稼いでは馬や艇ですかんぴん。女に家を追い出されれば呑み仲間連絡をして二日ほど泊めてもらい、次の女を見つけて転がり込む。この十年ほど殺しはしていないが、誘拐から脅迫から、犯罪行為は多々やつた。呪術師殺しの名が泣くぞと何度か言われたが、男は別に人を殺したいから殺していたのではない。強いやつと戦えるうえ儲かるから殺していただけで快樂殺人鬼と思われるのは心外だ。

この十年、人殺しの依頼を受けていないのには理由がある。一つ目、呑み仲間からまあまあ実入りの良い依頼が継続的に入っていること。二つ目、名前を捨てたため以前の知名度が使えないこと。三つ目、大々的に活動すると「お前生きとつたんかワレエ」と殺しに来られる可能性が高いこと。四つ目、呑み仲間が皆肉体的にも強いため、

実力者と戦いたいという欲求が満たされていること。

呑み仲間やその家族からは身内の判定を受けており、渋谷駅周辺をうろつけば呑み屋に連れ込まれるか家に連れ込まれるかだ。家に連れ込まれた時など、その家の婆さんから「帰ってくるなら先に連絡しろ」と怒られた。もちろんその婆さんは実家のもも婚家のもも遠い親類でもない、戸籍を江戸まで遡っても繋がりが無い他人だ。

ヘリポートの利用を頼んでる陣野ですけどと受付に声をかければ、職員用エレベーターで屋上に案内される。都市部らしい、星一つ見えない明るい夜だ。しばらく待つと遠くからヘリが近づき、ポートに降りてくる。

風を受けて飛ばされそうになり、四つ足の生き物のように身を屈めつつヘリに近づき扉を開けてするりと中に入る。

「トージクン乗った？」

『運転』と付く資格ならほとんど網羅している男、安本が後部のシートを振り返った。呪詛師の男、トージクンは「乗った乗った」と返しつつ扉を力強く閉めた。ヘリ内の嵐が止む。

「得物は大丈夫だよね」

「ああ、常に持ち歩いてらあ」

「上空から落とすけど良い？」

「んな簡単にや死なねえよ、気にすんな」

ヘリは揺れながら浮き上がり目的地へ飛び立つ。しだいに揺れは安定し、トージクンにも地上を見下ろす余裕ができた。ネオンがキラキラと輝く地上はまるで星空のようだ。

地上のなんとかとかいう歌があつたはずだ。中島なんとかとか言う歌手の……そうだ、地上の星だ。空ばかり見つめているから地上の星を見失ったとかなんとか、馬鹿馬鹿しいとトージクンは内心で吐き捨てた。

地上の星なんてものは、どんな物か分からないまま探したところで見つかるものではないし、ましてや他人に見つけてもらうものでもない。遠くにあるから星が星だと分かるのであり、身近にあってもそれが星だとは分からない。

誰しも、失ってから、遠くに来てから、ようやくと自覚するのだ。あれが自分にとつての星だったのだと。

とーじクンはかつて禪院甚爾として生まれ育ち、数年間だけ伏黒甚爾であり、今は別の名を名乗って生きている。片腕を失ったあの時までのありとあらゆるものを捨てて、振り返ることもできず、生きていく。

かつて伏黒甚爾だった男が、すぐ側にあった、手の中に握っていたものが星だったのだと気付いたのは、それを失ってからだった。

——もう十年ほど前のことだ。五条の跡継ぎ……相伝を二つも継いだ糞ガキ相手に全力を出して、負けた。片腕や腹の一部を持っていかれてもはや死に体、このまま放置されれば死ぬという状態に追い込まれた。

冷えていく体を自覚して、酒が呑みてえなどと呟いた。渋谷に行けば必ず現れる爺共の秘蔵を、一口で良い。いや、爺一人につき一口ずつ貰いたい。秘蔵というだけありどれも旨かったから、この意識が失せる前に呑めるだけ呑みたい。

死が怖いわけではないのだ。ただ、まだやりたいことがたくさんあった。禪院へ嫌がらせすること、禪院の地位を貶めること、禪院その他御三家の屑どもを殴ること、陣野の奴らと酒を呑むこと。やりたいうことを数え始めれば両手両足の指の数でも足りない。

残った腕で懐から紙片を取りだす。陣野が親しい相手にだけ渡す名刺だそうで、これを持っていけば渋谷をうろついても陣野に襲われないという代物だ。呪術師や呪詛師が避けて通る渋谷の陣野家と甚爾に繋がりがあることを呪術師らが知ったら、どんな顔をするだろう。目を剥くことは間違いない。それを想像してケケと笑った。

だが……陣野がこの暗殺騒ぎの裏にいてと思われるのは、困る。陣野には関係ないのだ。甚爾と同じで呪力を全く持たない、バフとデバフで呪術師を殴り倒すあいつらを巻き込むのは……嫌だな、と思った。タダで酒を呑ませてくれて、一族の誰ぞの家に転がり込めばタダで布団を貸してくれて、うるさいババアは甚爾を裸にひん剥くと風呂場に閉じ込めるのだ。肩まで浸かって百数えるまで出てくるな、と命じら

れた時は唾然としたものだ。

「なあババア、百数えたら何かあるのか」

「百数えられる良い子には風呂を出たあとにアイスがあるね」

甚爾はゆつくり百まで数えて湯を上がり、ほかほかと熱い体に冷たいアイスを流し込んだ。

八咫姫にも会った。口うるさいババア共とは対照的に静かな奴だったが、同じ線香の匂いがした。鼻垂れの糞ガキ信正に修行をつけろと追い回され、いくつか年下の正輝とはあちらへこちらへとツーリング。正輝の十離れた妹の初恋をうっかり奪って集団リンチを受けたが逆に全員のした。

血の繋がりなどない相手だ。呪術師や呪詛師と見れば襲いかかってくるヤバい奴らだ。この名刺を呪術師らに見られても、この事件の黒幕だと犯人だと疑われても、陣野には痛くも痒くもないかもしれない。だが。

立つ鳥跡を濁さずと言う。

名刺を端から噛み千切り、原型を失くすようにと咀嚼する。彼らとの繋がりを残すわけにはいかない。死に向かっていけるせいか唾液の分泌が悪いが、噛んでいればちよつとは出るもので、くちやくちやと口の中が潤っていく。

唾を飲み込んだ。その瞬間、額がカツと熱く燃える。額を勢い良く手で押さえるも掌は冷たい。熱いのはきつと——額の内側だ。

頭の中に低い女の声が響く。

『伏黒甚爾。お前がそのような姿になるとは……何があつた?』

石畳に引きずり込まれるような、背中から落ちるジェットコースターのような、独特の浮遊感の後。

甚爾は屋内にいて、八咫姫に見下ろされていたのだ。

そして禪院の家出っ子は、伏黒甚爾は生きていないことになった。あの大怪我では生きていないわけもない。遺体は誰ぞに盗まれたが、相伝を継がない肉体だ。探す必要性は薄かろう。ただあいつが持っていた禪院の武器は探さねばならぬ。

そうやって一年が過ぎ、二年が過ぎ、十年近く過ぎた。かつて甚爾に蹴りを入れては喧嘩を売ってきた信正は小学校を卒業し中学、高校を出て大学生になり、運転免許まで取った。甚爾のことをオッサンと呼んで憚らなかつた子供たちは甚爾を「とーじさん」と呼ぶようになった。

恵は——俺の子供は、いくつになつたらう。生年月日は思い出せるのに、今いくつになつたのかは指を折らねば分からない。今年高専に入学したから、十六か。でかくなつたものだ。

甚爾の腕を奪つたあいつ、五条の糞ガキに恵を預けたせいで、甚爾自身が伏黒家に帰ることはできない。代わりに陣野が卒業アルバムを作っている写真屋を買収して入手した恵の姿は幼い頃の甚爾そっくりで、見るたび笑つたし陣野の爺どもにも笑われた。ますますお前に似てくるが嫁さんの遺伝子どこ行つた、と。

へりは渋谷駅上空。扉のロックを外せば、髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜる強風がへりの中に襲いかかる。安本が甚爾の前に片腕を突き出した。

「健闘を祈る」

誰に言つてんだと鼻を鳴らして、宙に身を踊らせる。

星を探す誰だかに、ツバメなんぞよりもつと高い空から教えてやろう。地上の星は——この下にいる。

空から星が落ちてきた。首都高渋谷料金所の上階——渋谷駅を望むペランダから、家入硝子はそれを見た。

「高専の増援じゃないはず……一体何が」

首にかけていた双眼鏡を目に当て、まずは帳の表面、星が落ちた地点を見る。

帳に、しっかりと人が立っている。呪術師ではないのか？ 輪郭からして男、体格は良さそうだ。手に持っている棒状の物は武器だろうか。

「学長、あれは」

「わからん」

双眼鏡を上へ向ける。人影を帳に落としたのはあのへりだろう。ボディに何のマークも描かれていないため、あれがテレビ局のものなのか他の組織のもののかも分からない。舌打ちが漏れた。

「見ろー！」

鋭い叫びに、家入は双眼鏡から目を外して学長を振り返った。しかし学長は双眼鏡を目元に当てたまま——高さからして帳の上の人影を見ているようだ。家入は再び帳の上にレンズを向ける。

帳の上で男が舞っていた。否、舞うようにして棒を奮い、帳を削っていた。

「なにあれ」

「帳が壊れた……いや、一人分の穴を空けたのか」

男が帳に消える。あの高さから落下して無事とは思えないが、落下の衝撃を殺せる何らかの手段があるのだろう。

家入は唇を噛んだ。あの男が敵なのか味方なのか分からないけれど——敵でなければ良いのに。過酷な戦いを強いられている仲間たちだが、これ以上無茶と無理を重ねませんように。死にませんように。帳の外で祈るしか出来ない自分が嫌で、煙草の箱をトントンと叩いた。

ああ、なんて、ままならない。

「何が悲しくててめえ自身の顔を見なきゃいけないんだ」

帳を碎き甚爾が降り立ったのはとあるビルの屋上。そこには覆面の男と数珠を握った老婆、十年ほど前の自分がいた。

「ぜ、禪院甚爾……！ 死んだはずではなかったのか!？」

「禪院じゃなくて伏黒だっつーの。まあその名前も捨てたわけだけだよ」

老婆の顔には見覚えがある。血や髪などを媒介にして『子』や『孫』を対象者に変身させ、彼らを便利な戦闘人形として操る層だ。

どうやって遺伝子情報が盗まれたのだろうか。九年前に鼻根にしていた散髪屋か？ 髪に残存する個々の呪力から髪の主の特定など容易だろうし、この老婆はコソコソと動くタイプのはずだから、そう

やって盗まれたのかもしれない。

「伏黒？」

覆面の男から困惑したような声。——そうだろうとは思っていたが、覆面の男は呪術師らしい。

「ぐううう……」

しかしそれに答える前、若い甚爾の顔をした男が苦痛の呻き声をあげながら顔を掻きむしりだした。

「くっ……！ 『孫』、戻るのがじゃ！」

「うあ、ばあちゃ」

どろりと溶ける男の顔。老婆が「生きている」と認識している者には変身させられないのかもしれない。『孫』は全身をブンブンゴマのように振り回し悶えている。

甚爾はそれにニヤリと笑みを浮かべた。老婆は搦め手が得意で、『子』や『孫』を後ろから操るのに長けているが……本人の持つ攻撃力は低い。

「てめえら知ってて渋谷に来たんだろ？……ま、死に晒せや」

家出の際に実家、禪院家から盗んだ三節棍『游雲』との付き合いは二十年近い。より強く、より鋭く、磨き上げんと棍同士を擦り合わせて研ぐ。

帳に空けた穴を通り、陣野の女らの念——バフがビリビリと届いている。だから甚爾は陣野の依頼が好きなのだ。まるで体に羽が生えたように軽い。知覚できる世界が拡大してゆき、全てが鮮やかに輝いて見える。

スポーツで例えるならば「ゾーンに入った」状態といえる。脳内麻薬がはじめからフルスロットルだ。最高のコンディション、最高の気分。届く声援バフのなんと心地良いことよ。

八咫姫もとい陣野が甚爾に依頼したことはたった一つだ。渋谷を脅かす敵性存在を抹消せよ。

陣野は社会的地位を持ち、金も持ち、気っ風が良く、バフ掛けが便利で、入浴時間と睡眠時間については口うるさく注意してくる——常に優良な依頼人だ。その陣野からの依頼を完遂せんと、タメもなく、

予備動作一つなく、甚爾は動いた。

それはまるで瞬間移動に似ていた。覆面の男、猪野が気づいたときには『孫』は全身を滅多打たれて宙を吹き飛び、老婆は下顎と両肩が碎け倒れ伏すところだった。二級呪術師として幾多の現場を乗り越えてきた猪野の目をして、空から落ちてきた乱入者が瞬間移動したようにしか見えなかった。一瞬で二人を戦闘不能にするその実力に生唾を飲み込む。

禪院甚爾と呼ばれ、伏黒を名乗ったこの乱入者。顔は確かに伏黒恵と似ているが彼には呪力がなく、また猪野は伏黒某という中年の呪術師の話など聞いたことがない。なにせ呪術師というものは狭い業界だ、猪野が知らないなら存在しないとほぼ同じ。それに加えて『知ってて渋谷に来たなら』云々という言葉——この男は何なのだ。禪院なのか、伏黒なのか、それとも渋谷を支配する陣野の手の者か。いや、名前など今はどうでも良い。今この場に置いて重要なのは彼が敵か否かだ。

「おい、覆面のお前」

「あ?」

「渋谷の帳についてお前の知ってること全部ゲロゲロ吐け。……『こう』なりたくなけりやな」

口から赤い泡を噴く老婆を蹴りつけ、甚爾は猪野に向かって『游雲』の先を突き出した。

猪野は唇を歪めた。この男は少なくとも襲撃者ではない。しかし味方でもない。敵でも味方でもないということは、これからの出方次第で敵にも味方にもなりうるということだ。脳内の算盤がパチパチと上へ下へ、珠を弾く音が響く。

全ては猪野の双肩に掛かっている。言葉を間違えれば猪野は死ぬ。「答える前に、一つ質問がある。あんたは恵と……俺の仲間である伏黒恵と何か関係があるのか?」

果たして猪野は賭けに、勝った。

さて、時は十数分遡る。スクエアビルと渋谷駅が繋がる地下階、ケチズは体格に見合った太い声で「っしやあ!」とガッツを決めた。こ

れまでに増して筋肉が隆起し、表面に血管が浮き上がる。

帳に穴が空いた。陣野の女たちによるバフもデバフも阻んでいた帳に穴が空いた。視線で繋いだだけの弱く細い糸が、帳の穴のお陰で強く太い縄に変わった。

ブローアーを思い出させる轟という音はケチズの吸気によるもので、ケチズの肺は風船のように大きく膨らみ胸部の体積を倍増させる。

膨らんだ胸が萎めば、燃えるように熱い鮮血がケチズの口から押し出され勢い良く噴出する。バシャバシャと床に広がる大量の血液は自立した意識を持っているかのように動きだし、床から壁を這い上下へ走る。

ケチズの血が、ビルの上へ下へと根付いていく。

——女たちのバフ・デバフは、今回の帳のような例外を除いて、原則として陣野という縁を辿って届けられる。その場に陣野の一族がいればその者が受信機となり、本人にはバフを、周囲の敵性存在にはデバフを届ける。

むろん『一族』であることは血の繋がりだけに限らない。それが養子であれ、他家から迎えた嫁や婿であれ、陣野の者が『身内である』と認められた者は陣野の一族だ。

現在受信機となる者は、六名。八咫姫の第三名、陣野の子二名、身内と認められた者一名。たった六名で数千——やもすれば万を数える渋谷の人々を守り、人々を危険に晒す夏油の一味を打ち砕かねばならない。

ケチズの血は網となり、ビル全体を覆った。

「姉者ア！」

ケチズの声に合わせてビルが一瞬発光する。コンクリートを縫って根付いた血を媒介に、陣野の女たちによる守りの結界が作られたのだ。

ケチズの血には特殊な要素などない。エソウのように触れれば痛いわけでもなく、チョウソウのように変幻自在に武器として盾として操れるわけでもない。しかし、ケチズは三人のうちで一番「血の気」が多かった。多量の血を吐き出しても何ら困らない血液量とその補充

能力の高さは兄二人を遥かにしのぐ。

だからケチズがビルを守るのだ。誰よりも多く血を流せるケチズだからこそ、ケチズにしか出来ないからこその人選だった。

「ねね、ケチズちゃんだいじょぶ？ どー見ても致死量の血吐いてるけど」

「平気平気、むしろちよつと体が冷えて気持ちいいぞお」

カッカと燃えるように熱かった血が減り、今は体も頭も適度に冷めている。心配だと顔に書いている信正にケチズは「安心しろ」と胸を叩く。

「俺は血が多いんだあ」

現にケチズの体内では既に、さつき吐き出した量の三割にあたる血液が補充されている。

ケチズは強い。けてして兄二人に劣らぬほど強い。だがこの渋谷で求められているのは個として敵を誅する強さだけではなく——守るための力も必要だ。

ケチズにはそれを叶える手段があった。だから遠くでケチズを見ている姉に要求する。

「姉者あ、もつと……もつとバフだあ。一重の結界じゃ特級の攻撃に耐えられるか分からん。二重に、三重に……かさねがけするんだあ」

さあ、この身よ煮え滾れ。魂よ燃え盛れ。ケチズの双眸から口許から黒い血が流れる。これは決して肉が溶け出ているのではない——情熱が沸騰して、出口たる穴から溢れ出ているのだ。

赤い血を塗り替えるように、闇よりも黒い血が走り出す。

この地下に、駅のホームに強大な呪霊の気配が近づいている。悪意に満ちた気配だ。早くしなければ……急がなければビルごと人が死ぬ！

「俺はー！」

急ぐ胸をドンと殴り、ケチズは吼えた。

「俺は人を守る！ 俺にはそれが出来る！」

はつと目を見開いて信正が合いの手を入れる。

「そうだ！ ケチズちゃんは強い！ 人を守る！」

「そうだろおっ!!?...だからあ、だから応えろ、俺の呪力!!」

求めるのは呪霊も呪術師も通さない、無辜の人々を守るための壁。守るための力が欲しい。大人数を一人で守るための力が欲しい。

沸く胸に湧く力を感じ、それを力強く引つ張って手元に手繰り寄せ
る。

「闇より出でて闇より黒く!」

巨大な帳を下ろすには起点とすべき呪物が必要なら。

「『その穢れを禊ぎ』」

特殊な帳を下ろすには触媒とすべき呪物が必要なら。

「『祓え』ツ!!」

ここには呪物がある。ケチズの血には呪力が宿る。

ならば出来る。

——そら、出来たじゃないか。

陽子は母に聞いたことがある。どうして私は家の中にいて、お兄ちゃんたちがお外に出るの? 私たち陣野の女には祓う力があるんだから、女が出れば良いんじゃないの。

母はその質問に微笑んだ。

「陽子、おとよさんのお話は何度も聞いたから知っているわよね。うちの女の子はね」

母は陽子の頭を撫でながら、ゆったりとした口調で話す。

「呪術師たちに連れ去られたらお父さんやお兄ちゃんたち、みんなが悲しむから外に出ないのよ」

そう、呪術師は危険だ。第二第三の加茂憲倫が現れないとは限らず、今無事だからといって五年後や十年後も平穏無事であるという確証はない。

だから陽子は「凄い権力を持った男」と結婚すると決めた。何年前だったか、又従姉の幸恵は甚爾と結婚すると言って目をハートにしていたが——陽子は知っている。幸恵は「肉体的に強い男」を狙っていたのだ。陣野の男衆五人を楽々倒した強さに惹かれただけで、絶対に甚爾でなければ……というほどの拘りはなかった。強く見た目が悪

くないから惚れかけた、それだけだ。現に幸恵が結婚したのは爽やか系イケメンスポーツトレーナーだ。

陽子は、自分を守って欲しいから権力を持つ男と結婚したいと考えていた。だって我が身が一番可愛い。泣く子も黙る絶大な権力の主なら、マネーパワーでなんでも解決できるだろう。そう考えていた。

八咫姫が繋いだ視覚の一つ。頭がちよつと足りないバカ従弟の信正と、八咫姫の弟で——数時間前まで別の意味で異質な見た目だったケチズ。そのケチズの想いに当てられて陽子はひっくり返った。

『俺は！』

『俺は人を守る！俺にはそれが出来る！』

今のケチズの見た目はバキに登場しそうなゴリマッチョで、はつきり言って全く陽子の好みではない。今まで好きになった相手は痩せ型か細マッチョだったし、これからもそういう相手を好きになるだろうと考えていた。

だから、おかしいのだ。こんな筋肉達磨はお呼びではないはずなのだ。求めていたのは泣く子も黙る権力であり、泣く子も黙る怖い筋力ではない。

「嘘でしょ……」

身を引き絞るように呪力を練り上げ、多人数を守るための帳を——限界を張ったゴリラにときめくはずなどない。呪力はあっても権力など持っていない。なのはどうして頬がこんなに熱いのか。

「嘘でしょお!?!」

布鈴緒を離さぬまま顔を真っ赤に染めて畳の上をじたばたと暴れる陽子を見て、祖母や母、幸恵までケラケラと声をあげて笑い出す。「八咫姫様も言ってたじゃない。恋はいつでもハリケーンって」と言う親戚の誰だかの発言に、むかし母から聞かされた言葉の続きを思い出す。

『でも、連れ去られるかもって萎縮してちやいけないわ。陽子が不幸になったら悪い奴らの思う壺だし、お父さんたちだって陽子に幸せになって欲しいからああして戦ってるのよ。自分の思うまま、願うまま生きれば良いの。恋だってなんだって、貴方の自由なのよ』

——権力者と結婚すれば、不安を抱えて生きなくても良くなると思っていた。誰も彼もを黙らせる圧倒的な権力があれば安心だと思っていた。

陣野の女に生まれたことを不幸だとは思わない。でも、「ただ好きになっただけ」で誰かと結婚することはないのだろうかと思っていた。一族にとつて得になる人と結婚するのが自分にとつても皆にとつても良いことなのだと思っていた。

だが陽子は今、ケチズのことを「好きになった」。権力者ではないし、全く趣味ではないどころかむしろ命の危険を感じるほど怖い見た目だし、しゃべり方はバカっぽい。

陽子にとつて、この恋は青天の霹靂だった。想定外の極みだった。はしゃぐよりも困惑が強かった。

「あああああああ」

布鈴緒を握りしめたまま頭を掻きむしり、唸る。

『恋はいつでもハリケーンなのじゃ』、陽子」

八咫姫の笑みを含んだ声に伝える気持ちの余裕がない。

恋に落ちる姿を家族に見られて恥ずかしくないわけがないのだ。こんな羞恥プレイの環境で開き直る以外にどんな態度をとれば良いのか。陽子は真つ赤な顔でわめき散らした。

「あーはいはい認めるわよ、認めりや良いんでしょ!? そうですよ、私はケチズのことを好きになりました!」

室内に歓声と指笛、拍手が響く。暗過ぎるほどに暗い渋谷の現状を吹き飛ばせとばかりに祝福が飛んだ。

「うううううるさいうるさいうるさい!」

「ルイズかな」

「ツンデレちゃんめ」

「こーい、しちやつたんだ、たぶんー」

「若いっていいわねえ」

年嵩の者たちは若者が恋する姿を眩しげに眺め、年下の少女らは身近な恋バナに沸き立つ——が、再び気持ちを引き締める。渋谷駅構内はほぼ地獄の様相を呈しており、チョウソウらは今も生か死かの淵で

戦っている。恋バナにはしゃいでいる場合ではない。

ただ、先ほどまでと違う点が一つある。彼女らの胸に灯る炎が、彼女らの背中を押す嵐がある。陽子の恋を応援する。だからケチズらに死なれては困る。彼らには、生きて五体満足で帰って来て貰わねばならぬ。

始まったばかりの恋には、その時にしか存在しない熱量と、周囲を巻き込み肥大化する風量がある。

ごうごうと燃え盛る嵐は渋谷に狙いを定め、動き出した。

三対一とはいえ、気絶した一般人や何故かこの場にいた夏油の養子を巻き込み事故で死なせるわけにもゆかず、五条の動きは精彩を欠いていた。夏油の仇である五条に襲いかかるならまだしも、何故彼女らはチョウソウらを襲ったのか。

彼女らを尋問するには生かしておかなければ。片方のみ選んで生かしておくのも問題はないのだが、二人いれば証言を突き合わせられる。

「さつきからやる気がないように見えますが、それならお帰りになつてはどうですか？」

「やる気はあるよ！　ただ好き勝手暴れまわっちゃうと事後処理が面倒になるからさあ！」

領域展開とは、ある特定の範囲に自分の世界を展開するから『領域』展開と呼ぶ。敵味方を選別して取り込むという芸当は不可能だ。

一応は味方であるはずのエソウとチョウソウまでも無量空処に取り込んだ五条を二人は怒っても良いのだが、親切なのか恩を売るつもりなのか、今のところ五条は無事だ。

「余裕でいられるのは今のうちだけだ！　こちらには——」

怒鳴り合いながらぶつかり合っていた漏瑚が言葉を止める。なにか変だ。五条と向かい合う漏瑚は十メートル近く飛び退いて三人から距離を取ると、何が起きたのかと目を大きく見開き周囲をぎよろりと見回している。

さつき、突如として空気が重くなった——この感覚には覚えがある。渋谷に呪術師や呪詛師が侵入するとどこぞから向けられる、陣野の威圧だ。

「甚爾が着いたか」

「でしようね」

トージというのが何なのかは分からないが、このチョウソウとエソウ……脹相と壊相と漢字を当てるのだろう呪胎九相凶二体、彼らの知るナニカが渋谷を覆う帳に侵入したようだ。

見れば、五条が彼らごとく巻き込んだ無量空処のせいで青白く染まっていたチョウソウとエソウの頬は血色良く、両脚にしつかりと力が入っている。威圧を受けているどころか回復している様子だ。

ということとはだ。チョウソウとエソウは陣野の派閥としてこの場に來ている。

普段であれば面倒で迷惑なあの連中が、今この場だけだろうが、何より頼れる存在に変わった。

「渋谷を選んだ自らの無知を嘆け」

にんまりと悪どい笑みを浮かべるチョウソウの体内で練り上げられた呪力は、もはや体内に留め置けぬほど濃く強まったのだろう。粘着質の糸のように指先から漏れ始める。間違いない、チョウソウは先程までより一層強くなっている。

ここに来て、五条は陣野が渋谷から呪術使いを排除できている力の一因を知る。チョウソウらは回復しただけではない。強化されたのだ。

敵対していなくて良かった。流石にこの二体を相手取り戦うのは五条をしても「大変」だろう。

「あーこわ。流石は陣野ってところかな？」

呪力を持たない一般市民の拳で、呪術師や呪詛師を血に沈める。それがどれだけ呪術使いを恐怖させることか。ふんぞり返っているだけのホワイトカラーのくせに、術式どころか呪力すら持たないくせに、呪霊を見も祓えもしないくせに。ただの拳で、呪術使いの心を折るのだ。

敵であれば恐ろしいが、味方となればこれほど心強く思える相手がいるだろうか。

「何をした、脹相！ 壊相！」

漏瑚の叫ぶような問いに、エソウは軽い口調で答えた。

「帳に穴を空けました。それだけですよ」

その「それだけ」がどれほど困難なことか知っていながら。

そして、花火よりも強く鮮やかに爆ぜる乙女の恋心^{パッション}が、二人に今――
――発破をかけた。

夏油を名乗る男は「目」からの情報、渋谷駅構内で起きている想定外についてウンと一つ頷いた。

漏瑚の方はもう駄目だ。あの状態では五条悟の半径四メートル付近に「五条悟に気付かれることなく」近づくなど不可能に近い。ならば夏油がすべきは渋谷駅ホームに留まることなく――

「作戦変更だ、真人。駅での五条悟との対面は避けて上へ行こう」

「えー、漏瑚はどうすんのさ」

「今日の我々の目的は五条悟を封印し、将来のため布石を打つことだろう？ 今あの場に行つては『夏油傑の生存によるインパクト』という重要な手札を一つ失うことになる」

明治神宮前駅から渋谷駅へは電車で四分。猛スピードで近づく現場を前に、夏油は真人へ計画の修正を語った。先に立っていた計画では渋谷駅5番・6番線乗り場で五条悟を封印する手筈だった。

再会の場には多量の生者がいる。五条悟の動きを止めうる、無力な猿で溢れる場でなければならない。しかし生者を補充するための術式を持つ呪詛師は五条の領域展開により気絶しており、これでは補充は不可能だ。

仕切り直しをしよう。

渋谷駅で改造人間を放ち、その際にA7出口に近いエスカレーターから上階へ向かおう。行き先は地下二階、生者でごった返した――スクランブルスクエアを舞台にするのだ。

スクエア入り口を守っているのは見かけ倒しの血塗と呪力を持たない猿のたった二人、押し通るなど容易い。

「仕方ないなあ」

あと少しで渋谷に着くところで、真人は肩をすくめて言った。夏油は安堵に笑みを浮かべかけ。

「……なーんて、言うと思つた？ 俺、ごじよーさどるがここで封印できるとか出来ないとかなんてどうでも良いんだよね」

真人の言葉に糸目を見開いた。ついトゲのある声が漏れる。

「真人」

「俺たちって……お互いに利益があるから手を組んだだけだろ？ 夏油は夏油で好きにすれば良いじゃん」

確かに真人ら呪霊は、面白そうだから、利益があるから夏油と手を組んだだけだ。あれこれと指示を受けたり縛られたりするような関係ではない。

元々の計画からして呪霊側の負担ばかりが大きすぎた。「五条悟にインパクトを与えるために表に出られない」などと言われても、夏油の出番までのあいだ五条悟と対峙し戦わねばならないのは漏瑚だし、花御は既に五条悟の手で祓ころぎわれた。現状では呪霊の力ばかりが削られている。

五条を引き付けているのは漏瑚で、改造人間を作り増やすのは真人で、それらにより出来た隙を突くのが夏油。美味しいところ取りではないのか？ 利用し利用される仲にしては——天秤が傾きすぎている。まるで最後に笑うのは夏油一人だけで良いのだとでも言わんばかり。労力に見合った利益を提示できないならば、夏油と真人らの同盟はここまでだ。

真人の主張は最もだ。タダ乗りを狙う者の意見に従う必要はなく、夏油は客観的に見てフリーライダーだ。

快樂主義の真人ですら夏油に対し譲歩し続けてきた。ならば今回譲歩すべきは夏油の方だろう。

「……分かった。私も漏瑚と合流しよう」

夏油は両手を上げて降参のポーズをとった。

そして、暴力的なほどの数の改造人間が乗った電車は——滑らかに渋谷駅に到着。扉が開き、『人間』が我先にと車両から逃げ出す。

だがホームに踏み出したとたん、ずん、と重石を背負ったかのような負担が夏油、真人両名にかかる。体内の呪力が薄れる——これは削られているのか？ 誰が、どうやって？

夏油は視線の主に気が付いた。電光掲示板に三つ目のマークがある。八咫グループのコーポレートロゴが二人を見ている。

やられた……！ 漏瑚の動きが悪い理由はアレだ。あの目が漏瑚

の動きを抑えているに違いない。そして明治神宮前駅で夏油らが威嚇されていなかったのは、夏油の目である呪霊が無事だったのは、二人を掌中に誘い込むためだ。

「なんだ!? めっちゃ重い……ッ!」

真人が膝に手を突き呻く。

呪力を持たない猿どもが呪詛師を潰せていた原因もこれなのだろう。渋谷は陣野のお膝元、あちこちに三つ目マークの広告や看板を出している。その目により縁を繋いだデバフを用いていたのだ。

呪力を持つ者は別の安全な場所にいるに違いない。小賢しいやり口だが活用の幅は広い。手持ちの呪霊に命じて付近の電光掲示板を破壊すれば、二人にかかっていた圧力は霧散した。

「視線だよ。液晶越しに見られたようだが……媒体を壊してしまえばどうと言うことはない」

列車内の液晶も構内の液晶も全て砕いてしまえば解決する程度のことだ。少し手間が増えたというだけで、さしたる不便はない。

あとは五条悟と呪胎九相図二体の視界に入らないよう移動すれば——数歩踏み出して、夏油は地面に膝を突いていた。さつきまでとは比べ物にならない「威圧」が夏油の膝を笑わせている。

なんだこれは。

この威圧は——神だ。この圧倒的な正方向の力は呪霊ではない、間違はなく神だ。誰かが神降ろしでもしたのか? いやまさか、ありえない。この場にいるのは五条悟、呪霊の漏瑚、呪霊もどきの脹相と壊相、そして千人近い改造人間だ。この中で誰が神降ろしを出来るというのか。

ならば誰かが神降ろしを行ったのではなく……神が気紛れを起こして降りてきたのだろうか?

神は気儘だ。祈れば必ず降りてくるとは限らない。降りないときは何を捧げようが何度祈ろうが降りてこず、降りてくるときは祈らなくても現れる。神が気紛れに降りてきたのだと夏油は確信した。

なんと酷い偶然だろう。

地面に縫い付けられてしまいそうになりながら、夏油は四つん這い

で床を進む。逃げねばならない。この場に残れば、神の勝手気まままで理不尽な暴力に巻き込まれてしまう。

負方向の力の塊である真人には夏油より酷い圧力が掛かっているようだ。真人の様子はほぼ五体投地に近い、いや、これは気絶しているのか。どうにか真人の首を掴んでエスカレーターに体を預ける。

上半身だけで良い、階段に体を預ければ自動的に上へ連れていくってくれる。はやく逃げなければ。激しく脈打つ心臓が耳に騒がしい。

夏油がいて、真人がいて、獄門疆があれば仕切り直しは利く。今日はもう逃げねばならない。ここから離れなければならぬ。

エスカレーターに倒れ込み、この場から逃げようとしている夏油の目の前。改造人間らが闊歩するそこへ現れた後ろ姿に、夏油は目をカッと開いた。ふわふわとした白髪の彼の手で次々と改造人間が殺されていく。

何故あいつは動ける。何故地に伏せていない。神降ろしに気付いていないはずがないのに、自分は威圧されていませんとばかりに動けるのは何故だ。あいつの術式、無限は神威さえ受け流すのか？

夏油は自分を叱りつけた。今はそんなことを悩んでいるほど暇ではない。男はまだ夏油に気が付いていないが、このままでは見つかってしまう。男——五条を封印するための奥の手を失ってしまう。

夏油にとつて運が良かったことに、エスカレーターに倒れ込んだ夏油の姿はまだ改造人間の影に隠れており、五条の視界に入っていない。五条が振り返ってしまいう前なら……今ならまだ、彼を封印できる可能性がある。やつが別方向を向いている今なら。

夏油は胸元を探ると掌より大きな立方体を取り出した。エスカレーターの段に背を預けたまま、上にゆっくりと連れていかれるまま、夏油は「それ」を五条に向かって投げる。この立方体こそが五条悟を封印するための呪具、獄門疆。

「獄門疆、開門」

五条が目を見開いてエスカレーターを振り返る。夏油は五条の視線の高さまで昇っていた。

五条の唇が「すぐる」と動いた。

五条悟の「脳内時間で」一分が経過し、獄門疆から杭を打ち込まれた彼に向かつて、夏油は声をかける。

「閉門」

——勝った。五条悟は獄門疆に封印された。渋谷駅周辺全てを巻き込んだ大殺戮の目的を達成し、夏油は哄笑する。

「はは、ははは！ やはり運は私を見捨てなかった……！」

このまま上へ逃げればなんとかなる。獄門疆の回収は後でも良い——五条悟ならまだしも、神降ろしの場へ行ける呪術師などいるわけもない。勝ちだ。「私」の勝利だ。ゲラゲラ笑う夏油の耳に、上りエスカレーターを下ってくる軽い足音が届く。

首を反らして見上げればスマホを耳に当てた男が、誰かと通話しながらエスカレーターを下っている。左手には傘。

なんだこいつは。

「……ええ、彼には見覚えがありません。十年ちよつと前にうちへお使いに来た子です」

渋谷駅周辺には帳を張っている。電波が届かないのに通話できるはずがない。そういう術式を持っているならば通話できるだろうが、この男には呪力がない。

四十代前半といった見た目の男は、夏油のすぐ頭上で立ち止まる。そして通話を切り、スマホをポケットに仕舞った。

無力な夏油は男に蹴り落とされた。中程まで上っていたエスカレーターの段差をごろんごろんと転がり落ちる。男には真人の姿が見えていないのか、真人はそのまま上へ。夏油は下へ。

男は——陣野正輝は軽快なステップでエスカレーターを下り、地下五階のホームに到着した。転がったままの夏油を姿勢良く見下ろしている。傘を持ったまま腕組みすると、疲れきった長嘆息を漏らす。「一般家庭出身の子であるからと、大目に見るのではなかった」

正輝は甚爾のことを親友だと思っている。身内以外には理解されない陣野の歴史に、おとよの悲劇を繰り返さないための暴力的解決法に、甚爾は深く理解を示してくれた。呪術使いの中にも甚爾のような者もいるのだと正輝は知った。

甚爾は「呪術使いはみんな糞だ。俺も含めてな」と言っていた。たしかに御三家ならば甚爾の言う通りだろう。だが、一般家庭出身の呪術使いが相手なら——暴力に訴えず、柔和に追いついてやるだけで良いのではないだろうか。彼はまだ学生で若いし、甚爾のように「呪術使いとしての」正道を外れる者か他にもいるのではないか。

そう主張した正輝に、当時陣野の男衆を束ねていた祖父は「好きにやってみろ」と頷いてくれた。

「久しぶりだね、きみ。その額はイメチェンかな、ノアの一族みたいだ」

十年前。正輝が彼にくれてやったのは正輝の叔父が買ってきた福岡土産だ。そこらのスーパーで買えるものとは価格も味も違う、ほうじ茶の香り高いお茶漬けの素。この僧衣の男は味わって食べたかどうか。

呆然と正輝を見上げる夏油の肩を、爪先でゆっくりと踏みつける。

「本当に残念だ、君には失望した。あいつの言う通りだったんだ……呪術使いはどいつもこいつも糞ばかりなんだ。俺が間違っていた」

地下五階はもはや地獄だ。改造人間の死体が山となり濃い血の臭いに満ちている。失われた命の数を思い、正輝の目尻から一筋涙が流れる。

あの時夏油を警察に引き渡していれば何か変わったのではないか。これだけの人が一度に死ぬことはなかったのではないか。後悔が正輝の胸に渦巻いている。

だから正輝はもう迷わない。呪術使いは皆殺しにする。いま渋谷にいる呪術師も呪詛師も、老いも若きも生かして帰さないと決めた。——おとよから続く呪術使いらとの縁を、今こそ断ち切ってみせる。

「甘い顔をしなければ良かった」

自分で蒔いた種、自分で摘むべきだろう。

——正輝は、夏油の胸に傘を突き刺した。

漏瑚は真人の数十倍の時を生き、数十倍の経験を積んできた。でなければ、何故か脹相に降りた神の力には耐えきれなかっただろう。獣

のように両腕を地面に突いて唸る漏瑚など無力に見えたのか、彼を放って哀れな改造人間らを殺して回る脹相と壊相に漏瑚はぎりぎりと歯ぎしりする。馬鹿にしくさって、と。

そんななか突如として五条の呪力が関知できなくなった。時を同じくしてホームの反対端から夏油の笑い声が響く。

夏油がやってみせたのだ。漏瑚の唇が笑みにめくれる。五条が消えればこの劣勢も幾分かマシになる——この神威が五条の無限に劣るわけではないが、強力な敵が一人減ったのは有難い。しかし喜びもつかの間、夏油の笑い声が急に止まった。何があつた。

「正輝、どうしてホームに？」

夏油の声かしていた方向からゆらりと現れたのは四十かそこらの男。親しげに名を呼んでいることから脹相の知り合いのようだ。

「主犯が」

正輝と呼ばれた男が声を詰まらせる。

「主犯の男が、俺がむかし見逃してやった呪術使いだった……。今、そいつを殺した」

「正輝……」

脹相と壊相は正輝の嘆きを聞いて立ち止まった。二体とも漏瑚に背中を向けている。こちらを向いているのは正輝だが、呪力を持たなければ呪霊の姿が見えないし、声も聞こえない。正輝に呪力は皆無。漏瑚はそれを利用した。

逃げるのだ。

獣のように体を低くしてホームを駆ける。五条を封印できたならばもはやここに留まる必要などない。夏油や真人と合流し、ここから逃げねばならぬ。

向こう端のエスカレーターの足元に夏油が転がっていた。その数メートル先には地面にめり込んだ獄門彊。あれの回収は無理そうだ。胸を突き刺されたようだが夏油はその程度で死ぬようなタマではない。首根っこを掴み勢いをつけて夏油を背負い、漏瑚はエスカレーターを駆け登る。

逃げてから十秒以上経つが追手がいない。見逃されたか？

エスカレーターの上には真人が転がっていた。気絶しているようだ。背中の夏油が小声で囁く。

「礼を言うよ、漏瑚。下にいるままでは動けなかったのですね」

漏瑚は夏油の言葉に鼻を鳴らし、同じく小声で話す。

「……来るのがずいぶん遅かったようだが、何をしていた」

「詳しく話したいところだが、ここではね。三つ目のないところで話したい。八咫の陣野は私を殺したつもりでいるからね」

周囲を見回せば、様々なものに三つ目のシンボルが描かれている。商品広告、看板、監視カメラ等の電子機器のメーカー表示。漏瑚は一つ大きな舌打ちをし、隣の登りエスカレーターに真人と夏油を乗せる。地下二階には便所がある。便所の中には監視カメラや広告の類いはないはずだ——少し遠いが、仕方ない。

脹相から距離を稼げば呪力を削る威圧が薄れていく。地下二階に着いた時点で真人を叩き起こし、夏油を背負ったまま便所に入る。

「漏瑚ってばもつと優しく起こしてよね」

「馬鹿を言うな。……それで夏油、何が起きた」

夏油は漏瑚の背から下りると洗面台に腰掛け、あのエスカレーターでの流れについて話し始める。情報共有だ。

「なに？　神降ろしをしたのは脹相だつて？」

「ああ、あの男に神が降りた」

その神の目ののだろうか、脹相の額には第三の目が生じていた。あの目に睨まればそこらの呪霊など一発で消滅だ。圧倒的な正方方向力で呪霊の負を埋め、弱体化させる。あの場にいたのが漏瑚で良かった。

「……特級呪物が、ねえ」

五条悟が封印された——悠仁が渋谷中に響き渡る大声でもたらした悲報に、伏黒恵は「くそが」と自らの太腿へ拳を振り下ろした。五条悟という男は、問題にならない程度の遅刻を繰り返して、生徒の救出よりお土産の購入を優先し、六本木に行くなどと嘘を吐いて山の廃病院に生徒を放り込み、死んだと思っていた同級生の「実は生きていま

した」ドツキリをかます。はつきり言つてクソだ。性根が腐っている。

性根が腐っているくせに、妙なところであるの男は素直なのだ。騙されやすいと言い換えても良い。そして思考回路が単純なたちで、自他共に認める「最強」であるからか小手先の技にひっかかりがちだ。

そのどれもを力業で振じ伏せてきたから五条悟が「五条悟」なのだ。

今回は——いや、「何故」も「どうして」も「どこで考えることではない。どんな手段にせよ、五条悟は封印されたのだ。

悠仁は冥冥らと共に渋谷駅地下五階を目指していたはずだが、地下から向かえなくなつたのだらう。地上に来るまでに時間が掛かつているだろうから五条が封印されたのは少なくとも五分は前のことだ。

いま、恵はさつき七海と共に倒した呪詛師が守っていた用途不明の呪具を破壊し終え、屋上に残つて老婆と青年の二人組を相手取つた猪野と合流するため、彼の元へ鶴を向かわせようとしていたところだつた。

「まず私を屋上で下ろし、それから虎杖君を迎えに行つてください」「うす」

恵の生得術式である十種影法術とくさのかげほうじゆつは利便性が高い。犬、鳥、蛙などの式神を、両手を用いた影絵という印を組むことで呼び出すのだ。式神それぞれに得意とすることがあり、鶴——巨大な怪鳥には術師を数人乗せたまま飛べるほどの飛行能力がある。

恵は七海と共に渋谷Cタワー屋上へ飛んだが、そこには戦闘不能にされ縛り上げられた老婆と男の二人しかいなかった。

「中から下りたようですね。私もホテル内部から下に向かいます」「了解です」

このホテル——Cタワーにいる呪詛師に三人が気づけたのは偶然、運が良かった。人混みで溢れかえっていると思われた渋谷駅周辺はがらんとしており、改造人間が通りをうろついて人を襲っているもの、被害者の数は少ないように見えた。

どこかに逃げ込んでいるのだらう。……そこを人造人間や呪詛師

らに襲われているかもしれない。そして恵が呼び出した式神は玉犬、犬だから耳も鼻も利く——渋谷駅近辺で一番血生臭い場所はどこか探させた。

そうして着いた駅から徒歩五分にあるホテルの中は、まさしく悲惨という他なかつた。改造人間や呪霊が人々を襲い、その肉を食らっていた。渋谷にいた人々はここへ追い込まれ、出口を塞がれてしまったのだろう。

ラウンジのテーブルや椅子、調度品は散乱し、フロントにも人の姿はない。血痕や死体が少ないのは丸飲みされたからか。

呪術師が三人いれば除霊と駆除ははやい。順調に階を上がって——七海が気付いた。

「上に、二つ……いえ、三つか。変な気配を感じます。呪術師がいるのかもしれない」

「上って言う……屋上つすよね」

七海の言葉に猪野が食いついた。工事や修理の作業員の可能性はないではないが、ホテルの屋上など基本的に人の出入りはない。夜分に作業をする必要性がないため……気配の主は緊急の修理か、でなければ不審者だ。

「問題が起きる前に倒してしましましょう」

屋上の三人が呪術師であれば、どうせ出入口に何かしらのトラップを仕掛けられているはず。やるなら空からが良いのではないか？

三人は鶴で屋上の呪術師らを強襲した。

屋上にいた呪術師らが守っていた何らかの呪具——三つの釘は全て破壊。あべこべの術式を持つドングリ目の男は首都高へ引き落とし七海と恵の二人かかりで戦闘不能にしたが、屋上に残った猪野は一人だけで二人を倒したようだ。七海はその事実には微笑みかけ、表情を消した。

違う。彼らを倒したのは猪野ではない。

この二人の怪我に残穢がない。猪野の残穢も、他の誰かしらの残穢もない。わざわざ呪力を纏わない攻撃をしたのか？ それは何故？

そうする必要があつたか、猪野以外の者が純粋な物理力である二人

を倒したか。七海は後者だと判断した。

顎を擦る。既に悠仁のもとへ乗り飛んでいった恵の——親のことが頭をチラリと七海の脳裏によぎる。呪力、術式とはシーリングスタンプの様なもので、使えば必ず残穢しやうこが残る。残さなかったのではないだろう……残らなかつた、ないし、残せなかつたのだ。

残穢を残さない呪詛師、禪院甚爾もとい伏黒甚爾のことを知っているのは、七海や伊地知までの世代もしくは禪院の人間くらいだ。呪力を持たない代わりに五感と身体能力に恵まれたフィジカルの鬼子、御三家たる禪院の名も義務も捨てて呪詛師となつた男。

死んだはずだ。呪力も術式も持たない彼は、生存を望めないほどの怪我を負つて死んだはずだ。「最強」に目覚めた五条悟が殺したはずなのだ。死体は見つかつていないけれど、五条は「たしかに殺した」と話していた。

一体ここで何が起きたのか。……死体が見つかつていないと言うことは、あの男が生きている可能性があると言うことだ。七海は額の冷や汗をハンカチで拭い、非常用エレベーターの壁にもたれ掛かつた。

地上にいたのは二人の男。一人は後輩である呪術師の猪野、もう一人は伏黒恵に似た容貌の——間違いない、伏黒甚爾だ。二人並んで、互いに敵意がないが。

「その人から離れなさい猪野君！」

七海は駆け出す。いま渋谷こごにいる呪詛師は敵だ……！

夕方に渋谷駅前で歌って——二千円に届かないお捻りを貰い、コーヒーションでハロウインのコスプレ大騒ぎを眺めていただけだったはずの川島聡太はいま、非常用電源により明るく照らされたスクエア内で震えていた。

彼の目の前で人が死んで、これまで彼が見たこともなかった化け物が見えるようになった。化け物は人を次々食い殺して——たかさんの人が死んだ。たかさん殺された。

スピーカーで「スクエアに行け」と声をかけて回っていた八咫グループの人の言葉に従いスクエアに逃げ込んだものの——恐怖は収まらない。

きつと、上の階に行った方が良いのだろう。化け物が見えない場所に行った方が、気が楽になるのだろう。だが、上の階では逃げ場がない。もしここへあの怪物が入ってくれば、どんどん上へ上へと追い詰められてしまう。一階なら正面出入口以外にも非常用出口やらなんやらあるし、ガラスを割って出るなんてこともできるだろう。

ビルの外で怪物がうようよと歩き回っているのが見えるけれど——川島は一階を離れたくなかった。

ガラス扉の向こうには八咫グループの人だろう中年の男が立っている。小型のスピーカーで中に入れと繰り返し、逃げてきた人一人一人に「一階に留まるな」と注意する。

川島はその背中をじつと眺めていた。大企業に勤めているから彼はあるに堂々としているのだろうか？ 座ったら二度と立ち上がれない気がするから、正面出入口をひたすらに見つめながら立っていた。何の役にも立たなくせに、一階に留まっていたのだ。

ふと、何かを握りしめていることに気がついた。荷物の背負い紐だ——スピーカーや財布や、様々な貴重品をコーヒーションに起きっぱなしにして逃げてきたのに、川島はギターだけ忘れずに背負っていた。

初めて買った、フラッキングVタイプのアンプ内蔵エレキギター。仕

送りもバイト代も少なく余裕がないなか、ようやっと買った安いものだ。スピーカーを買ったり良いヘッドホンを買ったりとで買い換えのための金がなく、使い始めてから三年になる。高いやつならもつと良い音が出せるのになんて道具のせいにして今日のお捻りは1385円。

才能がないことは分かっている。川島の音楽には人の目を引き付ける魅力がないのだ。——そろそろ音楽なんて辞めようかと考えていたのに、財布を忘れてギターだけ持っていた。

ガラス扉の向こうで、八咫グループの男がため息を吐いている。スピーカーの電池が切れかけているようだ。音量が一定しないスピーカーを見下ろして、今度は天を仰いで……男の背中に張りがない。

バッテリーとか、電池があれば良いんじゃないか。川島はエレキギターの電池を思い浮かべ、しかし頭を横に振る。単3とか単4なら渡せたけれど、このエレキギターに使う電池は形が違う。

こんなに人数がいるなら電池の一つや二つあるだろうに。誰も渡しに行かない。

当たり前だ。わざわざ男の様子を伺っているのは川島だけなのだ。川島以外は誰も男に注視しておらず、外の恐怖にただ怯えている。

エスカレーターの上と、正面出入り口を見比べる。二階にはたくさんの方がいるはずで、電池を持っている者もいるのではないか。

だが二階に行っているうちに化け物が来たらどうする。逃げ場のない上層階へ追いたてられてしまったらどうする。

川島は迷った。迷って迷って、エスカレーターに乗った。

「あの、誰か……電池持ってませんか」

誰もが怯えきって静かな屋内に川島の声が響く。

「正面玄関の人に、電池をあげたいんです」

百人を越える人の目が川島に集中している。

「単3か、単4か、モバイルバッテリーかも。ずっとスピーカーで呼び掛けてて、電池切れちゃいそうなんです。あの人にあげたいんです」

ざわめきが二階に広がる。持ってる？ 持ってない……電池なんて最近使わないよ。

エスカレーターから少し距離のある場所にいた男が無言で川島に近づいてきて、大容量のモバイルバッテリーを差し出した。ライトニングケーブルも一緒に渡され、川島は「ありがとうございます」と声を張り上げた。

次に川島の前に立ったのは若い女で、うぶ毛処理用のシェーバーから単3電池を取り出した。やはり川島は「ありがとうございます」と声を張った。

「ありがとうございます」を何十回も言ったし、言われた。「お願いします」も数えきれないほど聞いた。単3、単4、豆電池、モバイルバッテリーその他。化け物の目眩ましになるかもなんて言いながら傘を差し出す人もいた。川島はそれら全て受け取った。

ある人がくれた紙袋を電池類で満たして、川島は一階に向かった。

正面出入り口から男の声がしない——電池が切れたらしく、男は無言で立っていた。川島は紙袋に手を突っ込みながら男に駆け寄る。自動ドアが普段と同じ音をさせて開いた。

「あのー！」

振り返った男に、川島は二階にいた全員に代わって、電池を付き出す。

「使ってください！ あの……ありがとうございます！」

「これは……」

「見てたらなんか電池が切れそうで、何かしないとして……だからこれ！」

川島には正面出入り口で避難誘導をする勇氣などない。いつまたあの化け物が来るかも分からないのに、ずっと他人のために声を張り上げて体力を浪費するなんて考えられない。

川島の手から単3電池が一つ落ちて転がり、地面に置かれたスピーカーに当たって止まる。

慌てて拾おうとしゃがみかけた川島の腕を男が掴む。

「いいよ、私が拾うから。——持ってきてくれてありがとうございます。ここは危ないから、君ははやく中にお入り」

危ないと分かっているのに、男はここにいる。ビルの中にいる誰も

できないことを、彼だけがやっている。

彼の言う「ありがとう」の言葉が持つ重さに、川島は目の前がチカチカとするような目眩を感じた。人間としてレベルが違うのか？

「どうしたら貴方みたいになれますか」

「ん？」

「どうしたら貴方みたいになれるんですか。たった一人で皆を助けようなんてことできるんですか」

ここでする質問ではない。分かっている。それでも川島は知りたかった。

どうしたらこんな男ヒーローになれるのだろう。何を食べて、何を学べばこんなことができるのだろう。

「買いかぶりだよ、私は一人じゃない。一人ではこんなことできないさ」

男——正輝の言葉はほぼ文面通りの意味で、地下の出入り口に二人、渋谷駅内に二人、帳の向こうからバフを届けている身内が十数人いるということと言っていた。支援があるから立っていられるのだという意味だった。帳が破壊されれば増援も来る。だが、そんなことを川島は知るよしもない。

この男は、こんな非常事態の時でも心を支え続けてくれる「何か」を持っていてのだ。川島はそう解釈した。薄く微笑みすら浮かべられるほどの心の余裕があるのだ。

恐怖でひきつった顔、固いお礼の声、余裕がない人々の様子——こちらを安心させようと浮かべられた笑顔、柔らかなく川島を宥める声、余裕のある彼の雰囲気。

ふらふらと屋内に戻り、数歩よたよたと進んだところで座り込む。みつともない意気地無し。電池を渡す程度で勇気を全て使いきってしまったって、全く恥ずかしいにも程がある。自分が何もしなくても、彼はきつと彼なりの方策で動いただろうに、要らない世話をわざわざ焼いて彼の手間をかせさせた。

強い心がほしい。筋肉スグルみみたいな挫けない心と強い肉体がほしい。あんな風に笑える人になりたい。

なのにどうして自分はこんなに弱くて、情けないんだろう。

——そんな時だった。空気が少し変わったような気配がして、川島は顔をあげて視線を左右に走らせる。何も変わったようには見えな
い。

ところが瞬きした次の瞬間には赤い液体が床や壁にじわりとにじみ出す。それは毛細血管のような細かい線になり、下から上へ登っていった。

「なんだ、これ」

天井にも走る赤い線を見上げ、川島が疑問を口にしたらちょうどその瞬間、赤い線がほんのりと柔らかな光をまとった。

寒い屋外から屋内に入ったときのように——暖かさが川島の頬を撫でる。何が起きたのかと混乱している間に今度は黒い液体が床を壁を天井を走る。

目の前で太鼓の演奏を聴いている時のようなビリビリとした衝撃が体内の水分を揺らす。『俺は人を守る！』——そんな思念に魂が揺さぶられる。

地下だ。地下に、人々を守ろうとする誰かがいるのだ。

この思念の男がいるなら、正面出入り口の人も屋内に入って良いはずだ。あんなに強い声なのだ。任せてしまえばいいじゃないか。

川島は弾むように立ち上がり、出入り口に向かう。正面出入り口の彼はスマホで誰かと通話していた。

「分かりました、地下五階副都心線ホームですね」

電話なんて屋内ですれば良い。川島は彼の腕を引っ張り、小声中に入りましょうよ」と声をかけた。中にいれば安心なのだ。

しかし、男はスマホの下半分に手をかざして、首を横に振った。

「私の中には入りません。行くべき所があります」

「え、でも……中は安全ですよ！」

「もちろんそれは分かっていますよ」

「えと、そんな、でも……」

この人はどうして危険なところに飛び込もうとするんだ。中にいれば安心なのに、ここを離れようだなんて信じられない。

もう休んだって良いだろう。外にいる人を助けるためにずっと呼び掛け続けていたのだから、彼は休んで良いはずだ。

彼の腕を掴んだままの川島へ、彼は柔和に微笑んだ。

「大丈夫です」

なにが大丈夫なものか。なんの根拠もない自信じゃないか。

なのに川島は何も言えなくなった。ぐちゃぐちゃの思考で言葉が出ず、項垂れる。

男が離れていく。出入り口からすぐにある、壊されることなく無事だったエレベーターの下矢印ボタンを押して。手には傘。

「心配してくれて有り難うございました。貴方ははやく屋内に」

エレベーターが地上階に着き、男は振り返って川島に言った。

「……ええ。この目で確認して、もしもの時は」

この手で処分することも辞さない。

スマホの通話相手と何か物騒な話をしながら、男は地下に降りていった。

「なんだよ……」

自分の身が一番大事だ。安全地点があるならそこでじっとしていれば良い。それが当たり前だ。あの男がおかしいのだ。

「なんでだよー」

どうしてあんなに強くあれる。自分はその男のように強くいられず、ここで棒のように立ち尽くしているだけ。

悔しくて涙が出るのに——遠目に化け物の姿が見え、川島はギターケースの肩紐を握りしめながら屋内へ逃げ込んだ。

陣野の領域・渋谷を侵す者どもは全て排除せよ。

これが陣野の総意で、チョウソウもエソウもそのために戦っている。

——だから、チョウソウは呪術高専の制服を着たピンクブラウンの髪の青年と向かい合う。

「エソウは正輝と一緒に先に行け。俺はここであれを討つ」

ピンクブラウンの髪の青年——悠仁の犯したミスはたった一つ。

態度と言葉を間違えた、それだけだ。

「その箱……！ 返せ！」

渋谷駅地下四階、地下三階に繋がるエスカレーター前。悠仁はエソウがその手に獄門彊を持っているのを見つけ、反射的に、敵意を込めてエソウらを睨んでしまった。

そして「五条先生を返せ」ではなく、箱を返せと言ってしまった。相互理解に足る言葉ではなかった。

チョウソウは考えた。五条悟は高専の教師であるはずなのに、その人格を尊重されず『物』として奪い合いになっている。高専らしい制服を身に付けていなかったが、高専生だろう年頃の少女たちが夏油に助力していた。

ということは。呪術高専が内部分裂し、内紛が起こっているのだろう。

高専の敷地内でやりあっていれば良いものを、渋谷を舞台にして争うなど全く片腹痛い。元々呪術使いはどいつもこいつも信用ならなかったが、これでまた信用が落ちた。信用度が地を這うなんて生易しいレベルではない、マイナス方向に天元突破している。渋谷を巻き込んだことを地獄で悔いるが良い——渋谷に来た余所者は全員潰す。陣野の領域を犯した者たちは全員潰し、この世からすら追い出してしまえ。

チョウソウは獄門彊を持った弟と正輝を先に地上へ脱出させることにし、青年と……悠仁と対峙する。侵入者に会話は不要。

「百^{ひやくれん}斂——」

打ち合わせた掌の中で血を圧縮。

「穿血！」

赤血操術の基本が百斂なら、奥義は穿血。撃ち出された血の初速は音速以上で高い貫通力を誇る。水で金属を切るなんて実験もあるのだから血の弾丸が人を撃ち抜けないはずもない。

穿血は弾丸のように撃ち出せるうえ鞭のように振るうこともできる——が、初速しか音速を越えられない。一度撃ち出せば後は音速以下になる。

鞭を振るうとソニックブームが生じることがあるが、それは鞭の先端が瞬間的に音速を越えるため生じるだけであって、鞭が常に音速を越えた速度を出せているわけではない。

だから悠仁はチョウソウから逃れ得ていた。始めの攻撃さえ逸らせば後の攻撃は速度が落ちる。

とはいえ、音速とまではいかずとも秒速五十から百メートルほどの速度を持つ攻撃だ。それを避け続けるなど常人には不可能。生まれ持った高い身体能力と呪力によるブーストが悠仁の首の皮を繋いでいた。

「取り返さねーといけないのに……!」

悠仁は目の前の男を、殺意をもって睨み付ける。

——悠仁とメカ丸の残留意識が過ちを犯したのは、ある程度だが仕方のないことだった。

上京し呪術界に取り込まれてから半年も過ぎていない、そのうち二ヶ月ほどは地下で籠り生活していた悠仁と。近畿で生まれ育ち、機械の身体で京都校に通っていた箱入り息子のメカ丸と。二人とも、東京の——渋谷の異常具合を、渋谷が『別の国』であることを理解しきれていなかったのだ。

渋谷では陣野に逆らうな。

陣野は渋谷を、渋谷を住処とする自分達を守るためなら、自らの拳を血で濡らすことも厭わない。なに、我々の拳が振るわれる相手はだいたい人殺しの犯罪者だ……少し正当防衛が過剰になっただけさ。それにほら、呪術使いに人権なんてないだろう？

渋谷の平穏を守る一人として正当な怒りを覚え、チョウソウは眉間と鼻に深い皺を寄せて悠仁を睨み返した。先にこちらを侵したのはそちらのくせに、よくもまあ睨んでこれるものだ。取り返すだのなんだのと妄言も甚だしい。あれが何なのかは知らないが、あれに五条悟が封印されていることは分かっている。封印された弟たちの返還を呪術界と交渉するための人質として最適だろう。

怒りのあまりチョウソウの眉間はびくびくと痙攣する。

「俺も、俺たちも取り返そうとしているんだ。貴様らに破壊された平

和な渋谷を、奪われた家族を……！」

だから呪術使いは、ここで死ね。

幾度目かの穿血、その欠点を突かれた近距離は殴り合いになるかと思われたが、チヨウソウが可能とする術は穿血だけではない。百五十年の封印の間ずっと続けていた鍛練、そして姉に保護されてから読み漁った漫画やアニメは、それまでの赤血操術の固定概念を破り捨てた。

何故赤血操術の術者は血液の消費を惜しむのか？ それは人の血液量に限りがあるからだ。体重七十キロの成人男性の血液量は約五リットル、その二割で一リットルの血を失えば失血性ショックに陥り、三割失えば生命の危険、五割失えば心停止。現代の赤血操術の術師は血液パックを利用することでそのリスクを減らしているが……呪力がある限り血液を生成できるチヨウソウが血の消費を抑える必要はない。

だが無尽蔵に血液を生成できると言って、使いすぎれば後々に響く……かもしれない。余裕をぶっこいて無様に倒されるようなモブ敵キャラになどチヨウソウはなりたくない。

消費をある程度抑えつつ、しかしケチらず。参考になったのは漫画に登場する『水を圧縮し固めて刃にできる』という魔道具・閻水。警棒を改造した柄は伸縮し、三十センチから二メートルほどにまで伸ばすことができる。柄の表面に走らせた溝から血を通せば、十字槍だろうが薙刀だろうが刃の形は自由自在というわけだ。

赤血操術で用いられる刃物の形をした武器の代表例は血刃——けっじん血を高速で循環させることにより高い切れ味を誇る小刀ないしナイフだ。もちろんこれは術者が一度の戦闘で使用できる血液量が一リットル以下であることから鑑みて仕方のない大ききさなのではあるが……はつきり言おう。血刃の柄部分まで血液で作る必要性は、ない。手が血液に触れているため操作しやすいという利点は確かにある。しかし、そうだとしても柄全体が血液である必要はないのだ。

チヨウソウが懐から取り出した警棒を伸ばさず血を這わせれば刀になった。悠仁はそれを見て「げえ」と呻く。

鮮やかに血の赤に輝く刀の刃渡りは約八十センチ、間合いに入れば切り捨てられる。軽く床を蹴って二メートル足らずの距離をおいた悠仁はしかし頬に一筋傷を負う。——刀身が伸びたように見えた。伸びたように見えたのではない、伸びたのだ。

「ここで渋谷の平和の礎となれっ」

元が血液で作られた流動体、刃渡りはチョウソウの自由自在。また、鋼の刀と違い現在の形を保つ必要もないため、表面を有刺鉄線のように隆起させることも——他の術と組み合わせることもできる。

振り下ろされる刀をミリ単位の隙間で避けた悠仁の身を針が貫く。刃渡り一・七メートルほどに伸びた刀身はチョウソウの腕力と自重で勢い良く床を抉り、その運動エネルギーをほぼ全て取り込んだ血の刺が——刀身の形に圧縮され押し込められていた多量の血がヤマアラシかハリセンボンのごとく針山と化し、悠仁の腹や肩を貫通したのだ。

肩も、腹も、脚も……とつさに防がねば主要な内臓を蜂の巣にされていただろう。

悠仁は死がにじり寄ってきているのを感じた。悠仁は反転術式を使えない。傷つけられれば傷つけられたまま戦わねばならない。メカ丸の残留意思は悠仁にトイレでの戦闘をアドバイスする。

トイレなら上水の配管が一部剥き出しになっているはず。——赤血は水に溶ける。相手の武器を封じるため、戦うべき場はトイレだ。

チョウソウはトイレに逃げ込んだ悠仁を見て舌打ちをした。チョウソウらが肉体を得てからまだ数ヶ月……姉と同居してから三ヶ月も経っていない。絵本の読み聞かせに始まり、アニメを見て、漫画を読んで、低学年向けの小説を読んで——現代の文字に慣れ、一般常識を学び、小学生低学年の国語算数社会がある程度身に付き始めたところだ。ただ兄弟の持つ術式への理解を進めるため理科……生物だけ先行して深掘りし、血液の持つ性質について学んでいる。

——チョウソウが操る赤い血は、水に弱い。

悠仁の誘いに乗れば、使える術は肉体言語のみ。

どうする。

どうするもない。迷う理由はない。赤血操術が使えないからなんだ？ それは陣野の領域を侵した者を見逃す理由にはならない。陣野の者たちは術式を持たない。陣野は自らの拳で術師どもを打倒してきたのだ。

だから、チョウソウがここで悠仁てきを倒さなくても良いなどという言い訳は、存在しない。

それに——そう。姉者が視ている。弟の戦う姿を視ている。だが。

「どういうことだ……」

チョウソウは頭皮までぐっしより濡れた頭を抱え、水浸しのトイレを出る。

明確な死のイメージ。敵である、潰すべき相手から感じ取ったのは兄弟の縁。チョウソウの弟は八人、呪胎九相凶のエソウからシヨウソウまでのはずだ。

何が起きているのか。何がどうなっているのか。

チョウソウは訳の分からないもやもやとした感覚を振り切り、動きの止まったエレベーターを上る。トイレに瀕死の悠仁を残して、逃げるように。

エソウは、ケチズは、何か感じていないだろうか？